

学内広報

for communication across the UT



次期総長予定者に決定した濱田純一理事・副学長

特集：第7回ホームカミングデイ開催！
平成20年度学生企画コンテスト表彰式開催

2008.12.12

No. 1381

特集

第7回ホームカミングデー開催！

卒業生をお迎えするイベント・ホームカミングデーが11月15日(土)に本郷・駒場の両キャンパスで開催されました。当日は3600名もの方にご来場いただきました。当日の様子をご紹介します。



特別フォーラム 「世界の中の日本—日本の進路—」

キーノートスピーカーに元内閣総理大臣の中曽根康弘氏、パネリストに寺島実郎氏、R・フェルドマン氏、伊藤元重氏、田中明彦氏をお迎えし特別フォーラム「世界の中の日本—日本の進路—」を開催しました。現在の日本、そして世界の情勢について質問が飛び交い白熱した議論が交わされました。



歓迎式典

フォーラム終了後には歓迎式典が開催され、小宮山宏東京大学総長、張富士夫赤門学友会長の挨拶のあと、平尾公彦卒業生室長より同窓会近況報告があり最後はコールアカデミー、アカデミカコールのリードで「ただ一つ」を斉唱し締めくくられました。



少年少女サッカー教室・サッカー対抗戦



御殿下グラウンドにて東大LB会(東大ア式蹴球部OB会)主催、少年少女サッカー教室が行われました。たくさん子ども達が元気に走り回り、汗を流していました。サッカー教室の後はOBIによる対抗試合が行われ、熱い戦いが繰り広げられました。

東大落語寄席

毎年恒例の落語寄席が開催され、OBの方々が円熟の技を披露されました。大人気のこの企画、今年も教室は大盛況でした。



懐徳館一般公開・お茶会

加賀藩前田家ゆかりの建物・懐徳館がホームカミングデイ当日に一般公開されました。また現役茶道部員によるお茶会も開催され、学生らが着物姿で皆様をおもてなししておりました。都会の喧騒から離れた空間が、癒しのひとときを奏でていました。



現役学生によるキャンパスツアー

現役学生がガイドとなり、本郷の広大なキャンパスをめぐるツアーが行われました。多数の参加者がガイドのきびきびとした説明に熱心に耳を傾けていました。



本郷いちよう芸術祭

年々人気が高まっている「本郷いちよう芸術祭」が今年も開催され、学生団体(音楽部管弦楽団、柏葉会合唱団、和太鼓グループ～彩～、音楽部コーラルアカデミー)、東大教職員有志が諸先輩方にその活躍を披露しました。初の試みである講堂前広場でのオープニングイベント(彩の和太鼓演奏)では秋空高く音楽が響きわたり、来場された方それぞれに印象を残すような素晴らしい時間となりました。



駒場キャンパス

駒場キャンパスのホームカミングデイは今年建築協会賞(BCS賞)を受賞したコミュニケーション・プラザでのオープニング・セレモニーで幕を開けました。小島憲道大学院総合文化研究科長・教養学部部長の挨拶に続いて行われたスタインウェイのグランドピアノを奏でるピアノ独奏4曲とピアノ五重奏2曲からなる第4回教養学部選抜学生コンサートでは、圧倒的な曲の響きに会場いっぱいの聴衆が魅了されました。恒例となった「駒場の樹木をめぐるイベント」では梶幹男大学院農学生命科学研究科附属北海道演習林長による「温暖化と樹木・森林」と題した樹木の分布の不思議に迫る興味深い講演と、先生の引率によるキャンパス内の樹木へのネームプレート添付が行われました。小林寛道名誉教授による「スポーツ科学が社会に果たす役割」と題した講演会も多くの聴衆を集め、

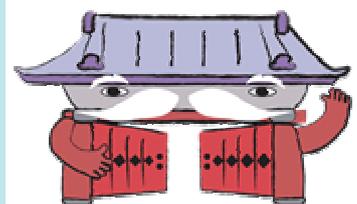


それに先立って行われた渡會公治准教授(総合文化研究科)の「中高年のための美しく立つ教室」と合わせて、高齢化社会と自らの高齢化に備えたトレーニングの大事さが説かれました。大学院数理科学研究科棟大講義室では「数学卒の『変人』人生」と題した高橋洋一東洋大学経済学部教授による講演が行われ、駒場博物館では特別展「behind the seen アート創作の舞台裏」、駒場図書館では企画展「一高蔵書展」が終日催されました。夕刻のレセプションはベテラン会と合同で行われ、大先輩方から最近卒業された方までが駒場の過去現在未来を語り合いました。のべ参加者数450名という多数のご参加をいただき、盛況のうちに一日を終えました。

来年のホームカミングデイは

2009年11月14日(土)

に開催いたします。



問い合わせ先: 本部卒業生グループ(内線21216)

平成20年度学生企画コンテスト表彰式が、11月10日(月)18時から福武ラーニングシアター(情報学環・福武ホール)において開催され、浅島誠理事・副学長から表彰状と副賞の授与の後、受賞者によるプレゼンテーションが行われました。

この学生企画コンテストは、学生が本学運営においても積極的に参加し活力あるキャンパス創出に生かすための取り組みとして昨年に引き続き実施し、18企画の応募の中から厳正なる審査の結果、優秀賞2企画が入賞となったものです。

また、昨年度の受賞者から企画の進捗状況の報告も行われました。



受賞者と記念撮影

賞状を持つのは

右側: 大久保智夫さん

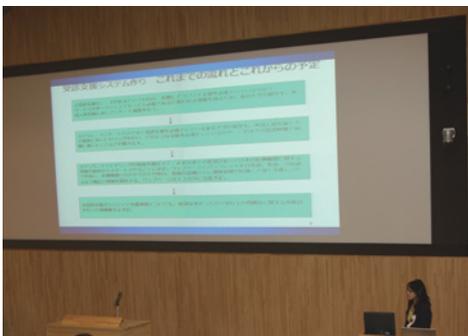
(経済学部3年)

左側: 宮武広直さん

(大学院理学系研究科

修士課程2年)

同時に行われた昨年度受賞企画の進捗状況報告



留学生のための受診支援システム



三四郎池のランドスケープ・リノベーション



東京大学アウトリーチイニシアティブ (UtoI)

受賞企画紹介

本郷キャンパス食環境改善プロジェクト

東大生キッチンプロジェクトチーム

代表: 大久保智夫

荒川あゆみ

白井 雄治

永幡 研

曾谷いず穂



企画目的:

学問と研究が学生生活の中心をなすことは当然だが、その学問・研究生活を支える重要な要素の一つが食事であることも事実である。私たちは、グローバル化する世界の中でリーディングユニバーシティを目指す東京大学にこそ、あるべき食環境へと改善を推進することにより、大学生生活の充実及び、大学の魅力の向上を目指す。そのため、日本人学生と留学生からのアンケートや意見をもとに、大学と食堂関係者に対して提案を行い、具体的な改善アクションに対しても積極的に協力する。また、学生がこのように大学・大学生協運営に積極的にかかわること自体が、大学における市民教育となると考える。



地方高校でも東大がぐっと身近に！

～大学院生 母校出張セミナー～

代表: 音野瑛俊

宮武広直、豊田丈典、生出秀行、藤野将生、小寺千絵、大録誠広、小野宣昭、池内桃子、石川遼子、永村直佳、松尾信一郎、榎戸輝揚、砂田麻里子、笠原 慧、成田憲保、横山広美

企画目的:

我々は本学大学院生による、出身高校を対象とした全国規模の出張セミナーを実現したい。そのためにセミナーを新規に希望する大学院生を、本企画メンバーと東京大学がサポートする枠組みの構築を目指す。その上で多くの大学院生を巻き込み、彼らの情熱溢れる最先端の研究現場を全国の高校生に伝えることを可能とする。本企画の波及効果として、①高校生は身近な先輩のセミナーを受けることで自身の具体的な将来像を思い描くことができる。②大学院生は自身の研究活動を第三者にわかりやすく伝える能力を向上させることができる。③東京大学は全国の高校と連携を深めることで智の共有を推し進めることができる。

NEWS

本部総務グループ

総長予定者決まる

—第29代総長に濱田純一理事・副学長—

小宮山宏総長の任期満了に伴う次期総長予定者の選挙の投票が11月27日（木）午後に行われた。投票は第4回目で終了し、その後の総長選考会議での選考結果を受け、濱田純一理事・副学長が総長予定者に決定した。

吉川弘之 総長選考会議議長は、この決定を濱田理事・副学長に伝え、就任を要請したところ、濱田理事・副学長はこれを受諾し、その結果、平成21年4月1日（水）から6年間、濱田理事・副学長が第29代総長に就任することとなった。

第4回目投票結果は、次のとおりである。

有資格者総数	2,309名
投票総数	1,554票
有効投票数	1,544票
白票・無効投票数	10票
(50音順)	
岡村 定矩	669票
濱田 純一	875票
計	1,544票

総長予定者の決定を受け、同日20時30分からおよそ1時間、薬学系総合研究棟講堂において、総長予定者決定に伴う記者会見が行われた。

記者会見は、武田洋幸広報委員会委員長の司会により、吉川弘之 総長選考会議議長の選考報告に続き、総長予定者に決定された濱田純一理事・副学長から、決定後の感想及び総長に就任するにあたっての抱負等が述べられ、その後、記者の質問に答える形で進められた。



抱負を述べる濱田純一理事・副学長



濱田純一理事・副学長と
吉川弘之 総長選考会議議長（第25代総長）



記者会見の様子

秋の紫綬褒章受章

上野川修一名誉教授、井上博允名誉教授が、本年度秋の紫綬褒章を受章いたしました。

上野川修一名誉教授（大学院農学生命科学研究科・農学部）

上野川修一先生（現日本大学生物資源科学部教授）が、「食品免疫学研究」におけるご功績により、2008年度秋の褒章で紫綬褒章を受章されました。



上野川先生は、食品の免疫系に対する作用を世界に先駆けて分子細胞生物学的手法を用いて研究し多く成果をあげられ、「食品免疫学」の新しい学問分野としての体系化に多大な貢献をされました。

上野川先生は、食品成分が栄養素のはたらきだけでなく生理調節機能を有するという機能性食品の概念を発信した研究者の一人でありますが、特に食品が生体防御機構である免疫系を調節しうることを、自らのご研究でお示しになり、またその概念を国内外に広められました。これらの独創的研究は、関連分野の研究者を刺激し、多大な影響を与えました。また若い世代をひきつけ、先生のご指導で本分野の多くの後進が育っております。

特に食品由来アレルギーの原因物質（アレルゲン）のリンパ球による認識、食品タンパク質摂取による免疫抑制（経口免疫寛容）、腸内細菌由来の生菌（プロバイオティクス）による免疫調節について多くの新知見を発見されました。これらの成果は、食品によりアレルギーなど免疫系の関係する疾病を予防、軽減できる可能性を示したものであり、機能性食品の研究開発、疾病予防の研究の展開に大きく寄与しています。また、上野川先生は日本食品免疫学会を設立され、この分野の基礎、応用研究の発展のみならず、免疫機能食品の開発における産学官の協力を推進し、日本発のユニークな研究分野を世界へ広めるべく、ご尽力されています。

今後の先生のご健勝とますますのご活躍を祈念してやみません。

（大学院農学生命科学研究科・農学部 八村敏志）

井上博允名誉教授（大学院情報理工学系研究科および大学院工学系研究科・工学部）

井上博允名誉教授が、ロボット学の研究功績により2008年度秋の褒章において紫綬褒章を受章されました。



先生の受章における世界初の功績として、1964年になされた博士論文研究において、人間が行なうような精密で器用な手作業を実現する鍵は、作業中の反力に応じて指令自体を変化させる性質であり、それが双動性であることを指摘し、計算機で制御される人工の手にこの機能を組み込んで、クランクを回転させ、ピンを穴に挿入できることを世界で初めて実験で実証し、この研究が米国で始まろうとしていたロボットの研究者に高く評価され、日本のロボット研究が欧米からも一目置かれることとなったこと、さらに、その後、電子技術総合研究所において作業中のハンドの動きを視覚で観察して調節するビジュアルフィードバックによる物体組み合わせ作業も世界に先駆けて実現され、米国パターン認識学会の最優秀論文賞を受賞されたことなどが挙げられています。

先生は、東京大学に任官されてから永年にわたって、機械工学および情報工学の教育、研究に努められ、機械工学、電子工学を融合したメカトロニクスやロボティクスの新分野を自ら開拓されました。教育面では、伝統的な機械工学に新風を吹き込んで機械工学の教育体系の現代化を推進され、機械情報工学という新しい学科の創設に力を尽くされました。研究面では、機構、制御、認識、知能などロボットで必要とされるあらゆる要素技術の研究開発に自ら取り組むとともに、これらを統合して数々の知能をもつロボットシステムを開発され、科学研究費知能ロボット重点領域研究代表、経済産業省人間共存協調型ヒューマノイドロボットプロジェクトリーダーを務められ、わが国のロボット学を世界のフロントランナーとして発展させることに貢献され、現在日本学術振興会の監事として我が国の基礎研究の振興に力を尽くされています。

以上のように、ロボット学における揺籃期から今日の成熟期に至るまで永年にわたって一貫してロボット学の発展に尽くされたその功績は誠に顕著であり、ご受章心よりお祝い申し上げます。

（大学院情報理工学系研究科 稲葉雅幸）

文化功労者顕彰

富永健一名誉教授、霜田光一名誉教授、浅島誠理事・副学長（名誉教授）、榊裕之名誉教授が文化功労者として顕彰されました。

富永健一名誉教授（大学院人文社会系研究科・文学部）

富永健一名誉教授は、1955年3月文学部社会学科を卒業、さらに大学院社会学研究科の修士課程、博士課程へと進み、1959年9月に社会学科助手に就任したあと、専任講師、助教授、教授として1992年3月に60歳で定年退官されるまで、文学部において社会学



の研究と教育に携わってこられました。その後も、慶應義塾大学環境情報学部教授、武蔵工業大学環境情報学部教授を歴任、1996年には紫綬褒章を受章されています。

富永健一先生の研究業績は多岐にわたりますが、まず特筆すべきは、『社会変動の理論』（1965年）によって、当時、欧米の社会学者たちが議論しはじめていた「インダストリアルリズム」の概念を基盤として、マルクス主義にとって代わる新しい社会変動理論を独自に展開されたことです。この理論はその後もさらに彫琢されて、日本の近代化過程についての先生独自の理論的構成（『日本の近代化と社会変動』1990年）へと結実しています。第二に、院生として参加された1955年の第1回SSM調査以来、日本の階層研究の代表的研究者の一人として、研究水準を発展させる上で比類のない功績を残されています。とくに、研究リーダーとして取り組んだ1975年SSM調査研究は、分析手法の革新と独自理論の構築だけでなく、日本における階層研究者の育成と研究水準の発展に絶大な貢献をなさいました。しかも先生は、社会変動理論を軸とする業績主義化論という独自の階層理論を展開されておりますが、厳密な実証的分析を基盤にして独自の階層理論を構築したような社会学者は、世界中で富永先生ただ一人といえます。

このように、富永健一先生は日本の戦後から今日に至る社会学の発展を終始リードしてこられた代表的研究者であり、その業績に対して文化功労者の栄誉が授けられましたことはまことに慶賀に堪えません。

（大学院人文社会系研究科・文学部 盛山和夫）

【写真提供：文部科学省】

霜田光一名誉教授（大学院理学系研究科・理学部）

霜田光一名誉教授（大学院理学系研究科）が2008年度文化功労者に選ばれました。霜田先生は1943年に本学理学部物理学科を卒業なされ、1948年本学理学部助教授、1959年から同教授を務められ、本学退職後も現在に至るまで物理の研究、教育に活発な活動を続けていらっしゃいます。



霜田先生が最初に手がけたのはマイクロ波レーダーの研究であり、終戦後はそれがマイクロ波分光の研究につながっていきました。先生がその当時リードしたマイクロ波分光スペクトルの研究は、その後の日本の電波天文学の発展に大きく寄与しました。また、1950、1960年代のレーザーおよびレーザーの黎明期には、タウンズ（C. H. Townes）等と共にそれらの基礎を構築するという業績を残しています。その後はレーザー分光の研究に進み、シュタルク分光や二重共鳴などの基礎研究からレーザー応用技術まで幅広い研究を展開しました。

霜田先生は研究だけではなく、理科教育、物理教育にも熱心な情熱を傾けてこられました。2年前までの16年間ものあいだ日本物理教育学会の会長を務めたほか、たくさんの教育的な教科書や参考書を出版しています。また、物理分野においてこれまで数多くの指導的な研究者、教育者を世に出しています。

昨年の5月には先生の米寿を祝う会が開かれました。会の目玉は先生ご自身による講演で、お祝いに駆けつけた大勢の前で先生のアイデアによる3つの実験の実演と解説がおこなわれました。一つは永久磁石のみを使った磁気浮上実験（浮上体は完全に静止している）、二つ目はレーザーと光ファイバーを使った干渉実験、三つ目は自動浮沈子の実験と、どれも見る者を驚かせ楽しませるものでした。先生のつきることのない物理への愛着と好奇心、そして啓蒙のお気持ちが強く印象に残る催しでした。これからも霜田先生には末永くお元気でご活躍されることを祈念してやみません。

（大学院理学系研究科・理学部 坪野公夫）

浅島誠理事・副学長 名誉教授（大学院総合文化研究科・教養学部）

浅島先生はこれまで、主に両生類胚を用い、胚発生のメカニズムに関する研究を続けて来られました。特に、胚のボディプランを決める基本ともいえる中胚葉誘導という現象を引き起こす物質が何であるのか、半世紀以上もの間様々な研究者の努力にも拘わらず見出せなかった中、浅島先生はアクチビンというタンパク質に強い中胚葉誘導活性が存在することを世界で初めて発見されました。また、胚発生に重要な役割を果たす多くの遺伝子を同定・機能解析し、胚発生の分子メカニズムの解明に大きな貢献を果たして来られました。



さらに浅島先生は、未分化細胞にアクチビンタンパク質を処理すると、その濃度の違いによって、腎臓・心臓・膵臓・目などを始めとする様々な種類の臓器・器官が誘導されることを見出しました。この研究結果は、近年目覚ましい進歩を遂げる再生医療にすぐさま応用が可能であり、実際、マウスES細胞を用い、同様の処理によって哺乳動物細胞からも様々な臓器系細胞が誘導できることを示されました。ごく最近マスコミでも大きく取り上げられているiPS細胞に関する研究と併せ、先生の出されてきた研究結果は、今後“健康長寿社会の実現”という形で社会へと還元されていくことでしょう。

浅島先生はこれまでも紫綬褒章、日本学士院賞を始め数多くの賞を受賞されてきました。今回の受賞と併せ、先生が行ってこられた研究が国内外で高く評価されていることを客観的に示すものです。また、日本学術会議副会長、日本発生生物学学会会長、日本動物学会会長など多くの要職を歴任されてこられました。現在も本学理事・副学長を務められるなど大学内外で多忙を極めておりますが、その一方では研究者としてラボを主宰し、研究活動を継続されておられます。後輩一同、文化功労者のご受賞を心よりお喜び申し上げますと共に、今後益々のご発展を祈念いたします。

（大学院総合文化研究科・教養学部 道上達男）

榊裕之名誉教授（生産技術研究所）

電子をその量子的な波長と同程度（10ナノメートル程度）の半導体空間に閉じ込めれば、波としての側面が顕著に現れます。本学名誉教授の榊裕之先生は、長年に亘り半導体ナノ構造における電子の量子的制御及びそのエレクトロニクス応用について研究を進められ、物質科学、固体物理学、電子工学の発展に顕著な貢献をされてきました。



榊先生は、1975年に、超薄膜上に周期的凸凹構造を有する表面超格子の概念とその非線形伝導素子への応用を提示されました。このご研究は、膜厚方向に加え新たに面内にもナノスケールポテンシャルを導入したものとして意義深いといえます。また、1980年には、量子細線内の1次元電子の伝導特性を解析し、超高移動度を電界効果トランジスタの可能性を示されました。

さらに、榊先生は、筆者と共同で、電子を3次元的に完全に閉じ込める量子ドット概念とその応用として量子ドットレーザを提案されました。1982年のAppl. Phys. Lett.誌に掲載された量子ドットに関する論文は、現在でも広く引用されており、量子ドット研究の原典として位置付けられています。榊先生の一連のご業績は、日本学士院賞、紫綬褒章、江崎玲於奈賞、藤原賞、IEEE David Sarnoff賞等多くの著名な賞をお受けになられることにより、内外で高く評価されてきました。

榊先生は、常に高い見識と強い信念を持ち研究に取り組まれるとともに、暖かく懇切丁寧な指導のもとで、数多くの優れたお弟子さんを育てられました。また、日本学術会議会員や応用物理学会会長などの要職のお立場から、我が国の学術の発展に大きく貢献されてこられました。

榊先生は、現在、豊田工業大学副学長・教授として大学の管理と研究の両方に重責を担われています。先生の今回の顕彰を心よりお祝いするとともに、今後のご研究の発展とご健勝を祈念したいと存じます。

（先端科学技術研究センター（兼）生産技術研究所 荒川泰彦）

一般ニュース

地球観測データ統融合連携研究機構 (EDITORIA)

「データ統合・解析システム (DIAS)」
平成 20 年度中間報告会開催

一般

10月29日(水)武田先端知ビル「武田ホール」において、「データ統合・解析システム (DIAS)」の平成20年度中間報告会が、地球観測データ統融合連携研究機構 (EDITORIA) 主催で開催された。

「データ統合・解析システム (DIAS)」は、地球規模観測や各地域における観測で得られるデータ、また、数値気象・気候予測モデル等の出力データを収集、永続的に蓄積・統合・解析し、さらには社会経済情報などとの融合を行い、世界の環境問題や自然災害などの脅威に対する危機管理に有益な情報へと変換して、国内外に提供することにより、わが国の総合的な安全保障や国民の安全・安心の実現に資することを目的としている。また、当該科学技術分野におけるわが国の国際的主導性を発揮して、包括的で調整された持続的な地球システムの観測を達成することを目的とする『複数のシステムからなる全球地球観測システム (GEOSS)』の構築を先導するものである。



小池機構長によるプロジェクト冒頭の説明

会議の冒頭では、文部科学省研究開発局海洋地球課地球・環境科学技術推進室の谷広太室長から、DIASは「知の統合化」を具体化するプロジェクトであるとともに、GEOSSの精神やコンセプトを具現化するプロジェクトである。DIASを使いこなし社会的にインパクトの大きい成果を期待しているとの激励のご挨拶をいただいた。その後、「地球観測データの科学的・社会的に有用な情報への変換」に係わる9つの利用研究課題、「シス

テム開発」の3研究課題、さらに「データ投入」に係る3研究課題における平成20年度の研究進捗が紹介された。

「総合討論」では小池俊雄機構長より、DIASが目指すものとして、「分野を超えて共有できる知」、「世界で共有できる知」、「体感できるデータと情報」、「公共の利益分野への貢献」が挙げられ、この目的達成のため、DIASはハードウェア、ソフトウェア、メタデータ研究などのコンピュータサイエンスの研究者と水循環、海洋、農業、気候変動、生物多様性等の研究者等、分野を超えた研究者が協力して研究できる環境が提供されていることが示され、どのように研究を促進していくか、また、今後どういうところに焦点を当ててデータ統合解析システムを進めていくかなど目的達成のための活発な議論が行われた。

DIASは研究開始から2年半が経過した。DIASは平成22年度までのプロジェクトであるため、今年がちょうど折り返し地点である。今回の平成20年度中間報告会ではデータ統融合システム開発・データアーカイブ、データ解析が順調に進んでいるという認識を持つとともに5年間研究のゴールを視野にいった意見交換がされ、大成功に終わった。



小池機構長によるプロジェクトの方向性の説明

なお、本中間報告会の状況は、地球観測データ統融合連携研究機構 (EDITORIA)、ならびに、データ統合・解析システム (DIAS) のHPに掲載されている。

地球観測データ統融合連携研究機構 (EDITORIA)

<http://www.editoria.u-tokyo.ac.jp/>

データ統合・解析システム (DIAS)

<http://www.diasjp.org/>

本部奨学厚生グループ

学寮・国際学生宿舎で消防訓練を実施

一般

11月1日(土)、本部奨学厚生グループ所管の学寮・国際学生宿舎において、消防訓練を実施した。

まず、10時から白金学寮において、高輪消防署員の

指導のもと3階のキッチンからの出火を想定した避難訓練、消火器の取扱い説明、訓練用消火器による消火訓練、実際に火災を目撃した場合の通報訓練、自動火災報知設備及び屋内消火栓の操作説明等、各種訓練を行った。

避難訓練では、寮委員から避難を呼びかける寮内放送が行われると、皆一斉に避難を開始し、スムーズに避難が完了した。積極的に消防署員へ質問をする寮生も見受けられ、防災について改めて意識する機会となった。

続いて14時から、豊島学寮及び豊島国際学生宿舎において、豊島消防署巣鴨出張所職員の指導のもと、消防訓練が行われた。まず、豊島学寮南寮4階のキッチンにて出火した想定で、避難訓練が行われた。寮委員が寮内放送で避難を呼びかけると共に、豊島国際学生宿舎へ火災発生を連絡し、的確に避難誘導を行った。

避難訓練後、消火訓練やAEDの使用方法等について、消防署員の方からご指導いただく予定であったが、急遽出動連絡が入ったため、本部奨学厚生グループ職員が訓練用消火器の使用法や、屋内消火栓の使用法、緊急の場合の通報の仕方等の指導を行った。

木枯らし1号が吹き、とても風の強い日だったが、豊島学寮、豊島国際学生宿舎併せて80名と、多くの参加があり、有意義な訓練となった。

また、18時より豊島国際学生宿舎の中庭において、豊島学寮・豊島国際学生宿舎合同で「寮祭」が行われた。学寮の調理師による料理の他に、餃子やお菓子、おでん等、寮生・宿舎生の手作り料理も用意され、皆美味しそうにほお張っていた。

近隣からも多くの方の参加があり、交流を深める良い機会となった。



消火器の使用法について説明を受ける寮生（白金学寮）



訓練用消火器による消火訓練（豊島国際学生宿舎）



寮祭で行われたビンゴ大会（豊島国際学生宿舎）

一般

地球観測データ統融合連携研究機構（EDITORIA）

北京アジア水循環イニシアティブ（AWCI）会合についての報告

アジア水循環イニシアティブ（Asian Water Cycle Initiative "AWCI"）プロジェクトを推進している、アジア地域の国際コーディネーショングループ代表メンバー（International Coordination Group "ICG"）が北京に一堂に会し、研究計画会議を行った。2006年9月にバンコクでAWCI - ICG会合の第1回目を開催し、その後、東京、インドネシア・バリ島での会合を経て、このたびの北京の会合はその4回目となり、特に、「データ統合」と「能力開発」にテーマを絞り、活発な議論が行われた。



AWCI 会合の様子

今回の AWCI 会合は、同じく清華大学らの主催により、清華科学技術リサーチパーク（北京市）にて、2008 年 11 月 3 日（月）から 5 日（水）までの期日で開催されていたアジア太平洋水文水資源学会（APHW）の第 4 回国際会議の特別セッションとして位置づけられており、AWCI からの研究レポートを数編、同会議にも論文投稿している。中国、バングラデシュ、マレーシア、ウズベキスタン、ラオス、ベトナム、ネパール、タイ、スリランカ、インドネシア、フィリピン、韓国、ミャンマー、そして日本の、アジア地域 14 カ国から各代表が参加したのに加え、総勢 40 名余りの参加者があった。2 日間にわたる会合では各国の水問題の状況をカントリーレポートとして発表し、インドネシア、バングラデシュで先行的に実施している、水問題のデータ取り扱いに関する専門家を養成するための「能力開発」活動の状況報告、「洪水、旱魃、水質」の 3 つのワーキンググループからの研究報告などが行われた。また今年度は「気候変動による影響とその適応」をテーマに新たなワーキンググループを立ち上げ、そのワーキンググループの共同議長には、韓国延世大学から Deg-hyo Bae 教授、バングラデシュ工科大学の Md.Mafizur Rahman 教授のお二人が任命された。



小池機構長によるプロジェクトの説明

また、AWCI 代表の小池俊雄教授（東京大学地球観測データ統融合連携研究機構・機構長）からは、先の G 8 洞爺湖サミットの宣言文書の中にも、GEOSS（複数の観測システムによる地球観測計画）による「データ統合」の取り組みが盛り込まれており、GEOSS の 9 つの社会的利益に貢献するテーマのうち、「災害、健康、気候、水、天候、生態系、農業、生物多様性」などのほぼ全域を AWCI の研究テーマがカバーしていることから、ますますこの AWCI の重要性が世界から大きく注目を浴びていることが紹介され、より一層の研究の推進・加速を目指すことが強調された。



AWCI 会合の参加メンバー

地球観測データ統融合連携研究機構（EDITORIA）
<http://www.editoria.u-tokyo.ac.jp/>

↑
 一般

総括プロジェクト機構

「学術統合化プロジェクト（ヒト／地球）シンポジウム—我々の未来はどうなるのか」を開催

11 月 3 日（月、文化の日）13 時 30 分より、安田講堂で掲題のシンポジウムが開催された。学内外の研究者や一般の方々を含め約 500 名の参加があり、活発な議論が交わされた。学術統合化プロジェクトは小宮山宏総長の主導により発足したもので、現在第 1 弾《ヒト》、第 2 弾《地球》の 2 つがあるが、それぞれ 5～6 年のプロジェクト期間のほぼ中間点にある。

シンポジウムは COE プログラム推進室矢野正晴教授の司会により進められた。まず、小宮山総長が学術統合化プロジェクトの背景について講演を行なった。「細分化は科学の必然的帰結であり、知の構造化が必要である。それには、意志を持った統合に向けた行動と、組織が個人をエンカレッジすることが必要である。さらに、今年全世界を震撼させた金融危機にも言及しつつ、教育に資源を集中すべきであり、研究と教育をリアルタイムでリンクすべきだ」と語った。



開会挨拶をする小宮山総長

基調講演では、まず J T 生命誌研究館中村桂子館長が、「“生きていること”を見つめる統合知」と題した講演を

行なった。科学で起きているさまざまな動きはすべて名詞ではなく動詞で考えることを求めており、この方法をとると科学以外の知ともつながり、さまざまな表現が生まれると述べ、統合の具体的方法の有効性を示した。次いで、気候システム研究センター長中島映至教授が、「気候変動と地球温暖化」と題し、いくつかの気候変動現象を紹介しながら、複雑な現象の理解のために、どのように異なる分野の知識が利用されているかを示した。

このあと、小池俊雄教授が地球観測データ統合融合連携研究機構長の立場から、超大容量で多様なデータを統合化し、身近な情報に翻訳できるデータ基盤の開発が始まっていることを紹介した。牧野貴樹特任助教は、学術統合化プロジェクト《ヒト》で、誰でもが生命科学のフロンティアを読むことができる環境づくりを目指して開発中の“University on Textbooks”システムを紹介した。知の構造化センター美馬秀樹特任准教授は、研究と教育とのダイレクトなリンクが可能な教科書システム「進化する教科書」を研究開発中であることを説明した。

パネル・ディスカッションでは、地球持続戦略研究イニシアティブ・統括ディレクター住明正教授がコーディネーターとなり、ジェロントロジー寄付研究部門秋山弘子特任教授と学術統合化プロジェクト《ヒト》リーダー高木利久教授も加わって、「年をとるヒト、年をとる地球」をテーマに、それぞれの専門の立場から活発な議論が行われた。



パネル・ディスカッションの様子

最後に平尾公彦副学長が、「20世紀の科学技術は人間中心の自然観であったが、21世紀の人類社会が直面している様々な課題の解決には、これまでの方法論だけでは不十分で、ことづくり（Innovation）が重要である。技術革新と女性、外国人を含めた優れた人材の育成が鍵であり、個人を基軸とする活力ある社会を創ることがわが国に期待されている」と締めくくった。



閉会挨拶をする平尾副学長

学生相談ネットワーク本部
平成20年度第3回教職員のための「学生のメンタルケア」講習会を開催

平成20年度第3回教職員のための「学生のメンタルケア」講習会が、11月5日（水）に柏キャンパス柏図書館メディアホールにおいて開催された。

6月に本郷キャンパス、10月に駒場キャンパスで開催した「学生のメンタルケア」講習会の第3弾で、午前は、学生相談ネットワーク本部精神保健支援室長の佐々木司教授、保健センター精神科の井野英江臨床心理士による講義「学生のメンタルヘルス問題の見かたと対応」が行われた。午後は、学生相談ネットワーク本部企画室長の亀口憲治特任教授による講義「学生にいかに対応するか～カウンセリング技法をとりいれて～」、学生相談所の教員らによる演習「学生対応のトレーニング」が行われた。参加者51名（10部局、教員26名、職員25名）は熱心に講習に取り組んだ。質疑応答も活発に行われ、学生対応への関心の高さが窺えた。



講義「学生のメンタルヘルス問題の見かたと対応」



演習「学生対応のトレーニング」



演習受講者による紙粘土の作品



1日目 検見川セミナーハウスロビー前

1日目【パートⅠ】は教育・学生支援系の矢野由美統括長による業務紹介、教務事務事例演習（あなたならどうしますか？）、検見川総合運動場&保健体育寮の紹介、課題討議。2日目【パートⅡ】では隣接する大学院農学生命科学研究科附属緑地植物実験所の見学、課題討議、学生相談ネットワーク本部企画室長の亀口憲治特任教授による学生相談の意義やお互いを元気にする工夫等の講義・演習を行った。



亀口憲治特任教授

本年度から教育・学生支援系の実務担当者にかかわらず、本学の職員として従事した年数がおおむね5年以内の者を対象としたので、学務業務に興味がある者が参加することができ、様々な実務担当者の意見を聞くことで有意義な勉強会となった。また今回は宿泊研修ということもあり、普段はあまり接する事のない他部局の人達と親睦を深めることができ、今後の糧となったのではないだろうか。

本部学生支援グループ

「平成20年度学務研修会実務勉強会」 開催

一般

11月12日（水）から13日（木）にかけて、千葉県にある検見川セミナーハウスにおいて「平成20年度学務研修会実務勉強会」が開催された。本部を始めとし、部局や各専攻など学務に携わる担当者や学務業務に興味のある者など、計28名が実務勉強会に参加した。実務勉強会は、本学の教育・学生支援系業務のあり方や求められる職員像について考える機会とするとともに、業務の円滑な処理に必要な基礎知識を修得させ、学生支援体制の充実と業務能率の向上に資することを目的として、教育・学生支援系が中心となって毎年行っているものである。

政策ビジョン研究センター

設立記念フォーラム 「一東大発の知で社会の課題を解決する」を開催

一般

11月14日（金）鉄門記念講堂において、政策ビジョン研究センター「設立記念フォーラム一東大発の知で社会の課題を解決する」（後援：大学院公共政策学連携研究部・教育部、協力：エグゼクティブ・マネジメント・

プログラム) が開催された。

本フォーラムは、今年7月に総長室総括委員会の下に発足した政策ビジョン研究センターの活動について、学内外に広く周知するとともに、当センターと学内のさまざまな研究プロジェクトとの連携及び横断型研究ユニット組成のきっかけとすることを目指したものである。

開会にあたり、「課題先進国日本と政策ビジョン研究センターへの期待」と題し、小宮山宏総長より、世界最高のシンクタンクを目指し、学内の高度な知をネットワークする「ハブ」になってもらいたいとのエールが送られた。また、オープニングの森田朗センター長の挨拶では、センターのミッションとゴールについて熱い意気込みが語られた。



開会の挨拶をする小宮山総長



意気込みを語る森田センター長

後半には研究ユニット等からのプレゼンテーションが行われ、田中明彦教授（東洋文化研究所・国際連携本部）、松本洋一郎教授（工学系研究科・知の構造化センター）、城山英明教授（法学政治学研究科）、永井良三教授（医学部附属病院）、大西隆教授（工学系研究科）より、現代社会の諸問題と求められる研究及び政策などについて報告があった。そして、最後にセンターの坂田一郎教授がプレゼンテーションの総括を行い、東京大学の知を結集して社会の課題に立ち向かっていく決意を語った。

フォーラム終了後には、学内外の関係者を招いたレセプションがカポ・ペリカーノにて行われ、政界や経済界のトップも駆けつけた。また、フォーラムの運営を手伝った公共政策大学院の学生スタッフも会に参加し、和やかな雰囲気の中に閉会した。なお、フォーラムには官公

庁や企業からの聴講者を含む学内外から 191 名、レセプションには 94 名の参加があった。

講演内容の詳細やプログラムについては、政策ビジョン研究センターホームページで公開している。

(http://pari.u-tokyo.ac.jp/event/20081001_forum.html)

本部奨学厚生グループ



「東京大学外国人留学生特別奨学制度平成 20 年度 10 月期研究奨励費受給者証書授与式」を開催

「東京大学外国人留学生特別奨学制度平成 20 年度研究奨励費受給者証書授与式」が、11 月 18 日（火）13 時 30 分から、関係役員等の臨席の下に御殿下記念館研修室で開催された。

外国人留学生特別奨学制度は、「大学院における特に優秀な私費外国人留学生に対し研究奨励費を支給することにより、本学での学術研究への取組を支援するとともに、諸外国からの優秀な留学生の受入促進に資すること」を目的として、平成 16 年度から設立されたものである。本年度 10 月期は、博士課程学生への経済的支援の充実が図られ、研究生 1 名、修士課程大学院学生 2 名、博士課程大学院学生 20 名の合計 23 名（月額 15 万円、支給予定期間：平成 20 年 10 月から標準修業年限の最終月まで）が受給者として決定され、当日は浅島誠理事・副学長から受給者に受給者証書が手渡された。



東京大学外国人留学生特別奨学制度受給者証書の授与

次いで、浅島理事・副学長から「多くの応募者の中から選ばれた皆さんに、学業や研究に専念していただき、日本と各国の架け橋となって国際的發展に貢献してもらいたい。そのために、東京大学としてできる限りの支援を考え、応援していきたい」旨の挨拶があった。引き続いて、受給者を代表して東京大学外国人留学生特別奨学制度採用者大学院工学系研究科の李時桓さんから、「日本での生活は、語学や経済的困窮など、困難はありますが、奨学生として選んでいただいたことに恥じぬよう、学業に励み、少しでも良い研究成果を残したいと思えます。この奨学制度にかかわる皆様、指導して下さった先生や研究仲間、事務職員の方に感謝いたします」とのスピーチがあった。



平成 20 年度研究奨励費受給者と関係者

<問い合わせ先>

本部奨学厚生グループ奨学チーム

内線 22548

本部留学生支援グループ

平成 20 年度第 2 回「外国人留学生支援基金奨学生証書授与式」開催される

一般

11 月 19 日（水）、平成 20 年度第 2 回「外国人留学生支援基金奨学生証書授与式」が開催された。「外国人留学生支援基金」は教職員ならびに卒業生の方々などからの寄附金で運用され、今回 10 名の留学生を奨学生（奨学金月額 5 万円／支給期間 6 か月）として採用したものである。

式においては、坂野仁留学生センター長（外国人留学生支援基金運営委員会副委員長）の臨席の下、浅島誠理事・副学長（同委員会委員長）から奨学生に証書が手交され、「本奨学金は多額ではないが、教職員、卒業生等の方々の善意によるものであるので、留学生活に役立てて、研究・勉学に励んでほしい」との挨拶があった。その後、奨学生を代表して大学院総合文化研究科博士課程の白 賢美さん（韓国）から、「日本に来てから色々な方に助けていただき、今回も奨学金をいただくことになって大変感謝している。期待に応えられるよう勉学に励むとともに、帰国後も韓国・日本両国間の交流に尽力したい」との謝辞が述べられた。

なお、本奨学生受給者は、前身の外国人留学生後援会から通算して今回で 270 名となった。ここに本基金の趣旨に御賛同いただいている皆様の御支援に対し、改めて御礼申し上げる次第である。



東京大学外国人留学生支援基金平成 20 年度第 2 回奨学生一同



謝辞を述べる白 賢美さん（大学院総合文化研究科博士課程）

本部入試グループ

入試事務室の設置

一般

平成 21 年度入学者選抜実施に関する事務を処理するため、平成 21 年 1 月 1 日（木）から 3 月 31 日（火）までの間、入試実施委員会のもとに、入試事務室が設置されることとなった。

入試事務室は、教育・学生支援系入試グループ長を室長に、室長代理、室長補佐及び室員若干名をもって構成される。

室員は、入試グループ職員のほか、本部各系等から派遣される事務職員で、およそ 3 ヶ月にわたり、入学試験に関する業務にあたる。

本部入試グループ

平成 21 年度大学入試センター試験の本学割当数決まる

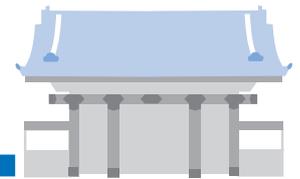
一般

平成 21 年度大学入試センター試験の東京地区での割当数が、75,495 人に決まり、このうち本学が分担する志願者数は 11,061 人に確定した。なお、平成 21 年度は、

本郷試験場及び教養学部試験場の他、都立高等学校2校、私立高等学校3校の計5校を借用して実施することになった。各試験場ごとの割当数及び担当学部は、次のとおりである。

試験場名		志願者数	担当学部
1	東京大学 本郷試験場	法学部	985 法学部
		経済学部	540 経済学部
		工学部	1,166 工学部
		その他	4 薬学部
		小計	2,695
2	東京大学教養学部試験場	3,234	教養学部
3	都立白鷗高等学校試験場	801	教育学部
4	私立富士見丘高等学校試験場	1,121	医学部
5	私立海城高等学校試験場	1,170	文学部
6	都立日比谷高等学校試験場	960	理学部
7	私立開成高等学校試験場	1,080	農学部
合計		11,061	

部局 ニュース



大学総合教育研究センター

日米高等教育財政ワークショップ
授業料割引戦略と基金の活用
Tuition Discounting Strategy and
Endowment Management

大学総合教育研究センターは、日米高等教育財政に関するワークショップを、9月5日（金）に、山上会館001会議室で開催した。このワークショップは、英語で通訳なしで行われた。

本センターは、これまで内外の高等教育研究者や教育関係者と積極的な交流を行ってきた。今回はアメリカの高等教育財政に関する第一線の研究者をお招きして、日本側高等教育財政研究者とともに、ワークショップを開催した。ワークショップにおいて日米両国の高等教育財政研究者は、大学財政の現状、財務基盤の強化、とりわけ学費・奨学金問題と基金について、日本とアメリカの共通の財政課題について活発な議論を行った。このワークショップから、日本の高等教育改革にとっても、有益なインプリケーションが得られた。

ワークショップでは、まず野村証券（株）の招聘により来日中のアメリカの高等教育財政研究の第一人者2名に、講演いただいた。講演者は、ルーシー・ラポフスキー氏とサンディ・ボーム氏の2名で、それぞれの略歴は以下の通りである。



ルーシー・ラポフスキー氏
(Dr. Lucie Lapovsky)

マーシー大学前学長、同大学経済学部前教授（経済学博士）。授業料割引と学生援助に関する研究のかたわら、ガウチャー大学やメリーランド大学で戦略的計画の立案に従事する等豊富な実務経験を有する。2005年10月に野村証券の招聘で来日し、「野村大学経営トップマネジメント・ワークショップ」の講演で好評を博した。主な論文に” Tuition Discounting and Prudent Enrollment Management” や” Rethinking Policy, Process, and Planning to Redefine Quality and Enhance Student Success”、東大・野村共同研究ディスカッションペーパーNo.3『米国大学における基金の活用』等がある。



サンディ・ボーム氏
(Dr. Sandy Baum)

スキッドモア大学経済学部教授、カレッジボード・シニアポリシーアナリスト（経済学博

士)。米国の高等教育財政、特に大学の授業料割引と学生援助に関する研究分野で権威の一人。カレッジボードの年次レポート「学生援助の動向」「大学授業料の動向」「教育の費用負担」の著者で知られる。学生債務のベンチマーキングに関する研究や、奨学金制度の再設計に関するワーキングの副座長を務める。近年の論文に” Hard Heads and Soft Hearts: Balancing Equity and Efficiency in Institutional Student Aid Policy”がある。

日本側の参加者は、小林雅之（大学総合教育研究センター・教授）、片山英治（大学総合教育研究センター・共同研究員）、劉文君（大学総合教育研究センター・特任研究員）、丸山文裕（国立大学財務・経営センター・教授）、塚原修一（国立教育政策研究所・部長）など12名で、両氏の講演のあと、質疑応答と活発な討論がなされた。



日米ワークショップでの発表風景

大学院理学系研究科・理学部
留学生見学旅行の実施
部局

夏の日差しがまだ残る9月6日（土）と7日（日）に箱根への見学旅行を実施した。今年は59名の留学生のうち院試を終えて一息ついた学部生数名を含む22名に国際交流室のスタッフ4名を加えた26名で新宿発の特急ロマンスカーに乗り、いざ箱根へ！まるでホテルを思わせるモダンなデザインと色使いの最新型の車内に旅の気分も一層盛り上がる。向かい合わせにした4人掛けの座席でおしゃべりを楽しむグループや日頃の疲れで2人仲良く昼寝をする学生、移りゆく車窓の景色を眺める人など、様々に道中の時間を過ごした。

箱根湯本から強羅までは登山電車、強羅から早雲山までは急な傾斜のケーブルカー、そして早雲山からはロープウェイに乗り、ついに最初の目的地、大涌谷へ到着。途中ロープウェイでは眼下に見える木々を眺めながらその予想以上の高度にみな言葉数が少なかったものの、濃い霧を抜け出た向こうに硫黄の煙が見えてくると元気復活。これが日本に来て初めての旅行という学生達にとっては、次々と眼下に広がる空中からの景色の移り変わり

も心躍る体験である。宿泊先のホテルでは美味しい日本食の夕食後、レクリエーションのゲームを通して参加者同士の交流を深めた。

翌日は晴天に恵まれローカルバスで箱根湿性花園へ。説明を受けた後、実際に広々とした園内を歩きながらみな、色鮮やかで可憐な高山植物を写真に収めるのに夢中になった。そして、午後は芦ノ湖遊覧船乗り場上のレストランで昼食を取り、遊覧船で元箱根へ向かう。湖上からは見渡す限り緑の木々に覆われた山と青空が前後左右に続き、風が心地よい。旅の最後は歴史を感じながら箱根旧街道杉並木を歩き、箱根関所資料館と関所を見学し、東京への帰路についた。日本の自然と歴史を堪能した1泊2日の旅行、留学生活のよき思い出となったに違いない。



さあ、出発！



自然の中を歩きながら、植物について学ぶ



湿性花園で、はい、ポーズ

10月に新しく入居した留学生44名を歓迎する催しが10月12日(日)18時より、三鷹国際学生宿舎共用棟ホールにて開かれた。

この会は、宿舎生会(宿舎に居住する全学生を構成員とする組織)、院生会(留学生の宿舎生活を支援する日本人大学院学生によるチューター組織)の共催にて行われ、留学生の他、日本人宿舎生、三鷹クラブ(旧三鷹寮OBの会)のメンバー約140名が参加した。

テーブルには焼きそば、おでん、小豆白玉などの料理が並べられ、参加者は思い思いに食事をしつつ、会話に花を咲かせていた。このイベントは、年々、日本人学生の間にも定着してきており、留学生と知り合う良い機会となっている。また、留学生と日本人学生が共に住むこの宿舎のメリットを増す一助となっているようにも感じられた。



クイズ大会での一コマ

会の後半はクイズ大会となり、参加者は6つのテーブルごとにチームに分かれ、会場前方のスクリーンに映し出されるクイズに賑やかに仲間と相談しつつ答えていた。その後、ビンゴゲームとなり、今年より「あがった」人からさらにくじを引いて賞品が決まるというルールが設けられたため、「豪華賞品」を狙う人にとっては二重のスリルを味わうこととなり、例年以上の盛り上がりを見せた。

日本に来て間もない留学生にとっては、初めてのことも多く、戸惑うことも多いだろうが、日本に在る間、いろいろな経験をして楽しく生活してほしいと願っている。



新しく入居した留学生と

10月17日(金)、武田先端知ビル武田ホールにおいて「第2回先端的大規模計算シミュレーションプログラム利用シンポジウム」が開催された。

このシンポジウムは、文部科学省が平成19年度より開始した「先端研究施設共用イノベーション創出事業【産業戦略利用】」からの支援を受けて、東京大学情報基盤センターを代表とする全国共同利用施設であるスーパーコンピュータを有する7大学(北海道大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学)が社会貢献の一環として、大学で開発された応用ソフトウェアとスーパーコンピュータ、それらの利用支援サービスを一体化して、民間企業への提供を行うプロジェクト「先端的大規模計算シミュレーションプログラム利用サービス」で採択されている課題の成果報告・中間報告を行ったものである。

米澤明憲情報基盤センター長の開会挨拶に始まり、田口康文部科学省研究振興局研究環境・産業連携課長から「第2回先端的大規模計算シミュレーションプログラム利用シンポジウム開催にあたって」と題して挨拶が行われ、引き続き、採択された民間企業6社からの口頭発表、13社からのポスター発表が行われた。

口頭発表では、戦略分野を設定し、大学で開発された先端的大規模計算シミュレーションソフトウェア(もしくは企業の有するシミュレーションソフトウェア)とスーパーコンピュータを利用することで、企業によるイノベーション創出を目指した「戦略分野利用推進」というカテゴリで採択された企業が発表を行い、可視化技術の研究開発、タービン設計のためのシミュレーション、燃料電池やタイヤ用ゴムなどの材料設計のためのシミュレーション、電磁環境適合性シミュレーション、創薬のためのシミュレーションといった内容が報告され、約110名の参加者が熱心に聴講した。

ポスター発表では、会場をロビーへと移し、「戦略分野利用推進」課題以外にも、これまでスーパーコンピュータ利用の機会がなかった利用者および利用分野を対象に、新たに有望な戦略分野につながる課題として「新規利用拡大」カテゴリで採択された企業が、この1年間、半年間で得られた成果について報告を行い、参加者と活発に議論が行われた。



シンポジウム会場内の様子

先端科学技術研究センター

高齢者向け転倒予防講座開催

部局

10月18日(土)、11月15日(土)の2回にわたり、高齢者向けの転倒予防講座(「足振動刺激付バランス機器による転倒予防-バランストレーニングで健やかな老後を-」)が開催された。これは、理学療法士でもある田中敏明特任教授の主導により、同教授らが開発した足指の感覚を刺激しながらバランストレーニングを行える機器を用いて行われたものである。

日本では、何万人という高齢者が屋内外で転倒し、多くの方が傷害を負っている。この転倒の大きな原因の一つに高齢者のバランス能力の低下がある。バランスを維持するためには起立した状態で地面とじかに接している足裏、特に足指で滑りやすい不安定な路面状況を感じてバランスを修正する必要がある。そこで、上述の機器を用いて足指の感覚を振動刺激しながらバランストレーニングを行い、転倒予防に関するバランスの検査とトレーニングを実践していただくのが今回の講座の目的である。対象は65歳以上80歳未満の高齢者で日常生活に装具、杖などを使用せず日常生活が自立している方。1コース20名で2コース分の募集を行ったところ、80名以上のご応募があった。

初日は、開始時刻の30分近く前から参加者が会場となった先端研の講堂に集まり始めた。普段は椅子、机が並んでいる場所に、パーティションが立てられたりヨガマットが敷かれたりといつものとは違った様子であった。冒頭、田中教授から講座の目的や検査・トレーニングの内容と流れ等についての説明があった。熱心にメモを

取っていらっしゃる方もいた。続いて、いよいよ評価測定の開始である。遠くは札幌から駆けつけてくださった理学療法士の方々にサポートしていただいて、「身体質問」「四肢長計測」「筋・骨格系評価」「臨床バランステスト」「感覚機能評価」そして、振動刺激付き重心計によるバランステストを一つ一つ行っていった。受講者の皆さんには幾分、緊張した様子も見られたが、非常に熱心に先生の言葉に耳を傾けられ、真剣に「テスト」に臨んでいらっしゃる。第一日のプログラムはここまで。続きは約1ヵ月後である。



田中特任教授より説明

紅葉の進んだ駒場リサーチキャンパスに再び集まってくださった出席者は、前回の約9割にあたる42名。講堂へ入室する際に、前回の「テスト結果」に基づいたトレーニングメニュー及びその方法が手渡された。各人のレベルに合わせて積極的に推奨されるトレーニングにチェック印がついていたりするのだ。講座は、田中教授の解説にあわせて理学療法士が模範演技を行う、というスタイルで進められた。席に座りながらご自身の体を動かしてみる方もいらっしゃった。



バランスを測定

一通りの説明後は実践編。グループに分かれて股関節周りのストレッチやバランス運動、タオルギャザーなどのマット上でのトレーニングと足腰を振動刺激しながらのバランス機器によるトレーニングがあった。苦笑い

を浮かべながら、あるいは余裕の表情で模範動作を見ながら実際に自分の体を動かしていた。複数の理学療法士がグループについているので、適宜、手で支えるなどして危険がないように目を配っていた。こうして無事に2日間計4回の講座は無事に終了したのであった。

参加者からは「自己流でやっていたので教えてもらえて参考になった」「思った以上に体を動かしていないことを反省しました」といった意見とともに、このような講座の継続を希望する声が多数聞かれた。田中教授は、今回の測定データをさらに分析し、またバランストレーニングの必要性を継続して伝えていきたいと述べられる一方、開発中の他の機器への応用やジェントロジー研究といった分野への発展も期待できるのではないかとのことであった。



トレーニングを実施



小雨の中の開会



ベトナム屋台のフォー・ボー

生産技術研究所

「外国人研究者・留学生との懇談会」
開催される！

10月23日(木)夕刻より、駒場リサーチキャンパスのユニバーシティ広場において、外国人研究者及び留学生と教職員等との国際交流を促進する目的で、生産技術研究所主催の「外国人研究者・留学生との懇談会」が開催された。

本懇談会は、生産技術研究所の国際交流委員会、懇談会実行委員会、事務局・国際交流チームの企画のもと、100人以上の教職員・学生ボランティアにより、例年通り国際色豊かな各国料理を屋台で提供する形式で行われた。今回は10カ国の出店があった。フランス、メキシコ、ブラジル、エジプト、パキスタン・インド(合同出店)、インド、ベトナム、中国、韓国、日本のグループから全11件の屋台が出店され、各屋台に長蛇の列ができ、本場の料理やドリンク類、そして日本の生ビールなどを楽しみつつ、随所で国際交流を深める人々の輪ができた。

当日は、開始当初は小雨、やがて本降りの雨となるあいにくの天気にもかかわらず、参加者は450名(参加者326名、ボランティア・スタッフ122名、招待者2名)と大盛況であった。

大学院教育学研究科・教育学部

バリアフリー対応施設のお披露目会



教育学研究科では、バリアフリー関連の施設の新設工事が竣工し、そのお披露目会を10月29日(水)に行った。新たに設置された施設は、地下1階から4階までのエレベーター、地上からエレベーター入り口まで車椅子で移動するためのスロープ、自動ドア(地下1階通用品、事務室、図書室)、多目的トイレである。多目的トイレは、バリアフリー対応型となっており、車椅子を使用した場合でも自由に動ける幅広いスペースを確保するとともに緊急時の対応ができるように設備されている。

本研究科では、平成18年度から全学に先駆けて教員3名を含むバリアフリー支援チーム(チーム長:武藤芳照副研究科長)を発足し、研究科内のバリアフリー整備に向けてハード面だけでなく、ソフト面についても準備をしていた。そのような中で、今年4月に身体に障害のある遠藤信也さんが大学院修士課程に入学したことにより、バリアフリー環境の整備は緊急の課題となった。図書館団地にある教育学研究科の建物は、地上から正面玄関に入るまでに階段があるため、遠藤さんは、自力で建物内に入ることはできなかった。また、図書館が4階にあるため、勉学に支障を来す事態となっていた。

お披露目会は、本部から本部環境グループ(施設・資産系)係長2名とバリアフリー支援室員3名、関係部局である小森田秋夫社会科学研究所長、横山伊徳史料編纂

所長、柳田則幸大学院情報学環事務長らに参加していた
 だき、本研究科からは武藤副研究科長、事務長をはじめ
 とする多くの教職員および遠藤さんが出席して、新たな
 設備の完成を祝った。まず1階のエレベーター前の廊下
 にて、武藤副研究科長から懸案の設備が完成したこと
 の報告と関係者への謝辞があり、次いで、遠藤さんから
 利用者の一人として感謝のことが述べられた。その後、
 遠藤さんと参加者がエレベーターを使って4階に移動
 し、新設された自動ドアから図書館に入るツアーを行っ
 た。遠藤さんは、大学院入学後初めて図書室に入ること
 ができ、満足された様子であった。

本研究科では、平成21年度には「バリアフリー教育
 開発研究センター」が新たに発足する運びとなっている。
 同センターは、今後、学内のみならず国内外のバリアフ
 リーの教育研究の拠点となることを目指している。その
 ようなセンターをもつ教育学研究科としては、今回のバ
 リアフリー対応施設の充実を基盤として、教育や人材育
 成などのソフトな面においてバリアフリー社会の発展に
 向けて研究科全体でさらに積極的に取り組んでいく予定
 である。



挨拶する武藤副研究科長



新設の多目的トイレ（3階）について説明を受ける学生



エレベーターの試乗風景

大学院農学生命科学研究科・農学部
 自衛消防訓練を実施
 部局

10月31日（金）12時15分から約1時間にわたり、
 農学部3号館、分子細胞生物学研究所本館、農学生命科
 学研究科附属動物医療センター及び生物生産工学研究セ
 ンターの建物において、平成20年度自衛消防訓練が本
 郷消防署の協力を得て分子細胞生物学研究所と共同で実
 施された。

訓練は、各建物の各フロア計15ヶ所から火災が同時
 に発生したとの想定で、火災報知器の発報、消防署等へ
 の通報等の初期消火訓練の後、各研究室からの避難誘導
 及び避難後の人員確認といった避難訓練では、実際に各
 フロアの防火戸を閉め、部屋に逃げ遅れた者がいないか
 確認しながら避難する等、実際に即した訓練を行った。
 また、逃げ遅れた者を助けるための消防署のはしご車に
 よる救助訓練やポンプ車による放水訓練の見学を行っ
 た。この放水訓練には、今年「火災予防業務功労者」と
 して表彰された本研究科の自衛消防隊も参加し模範演技
 を披露した。

その後、農学部グラウンドに移動し、消火器を使用し
 での消火訓練を行った。昨年に引き続き、本研究科の要
 望により、通常の訓練に使用する水消火器ではなく、実
 際の火災に使用する粉末消火器で行ったが、その消火力
 や粉末の多さに参加者から感嘆の声が上がり、消火器取
 扱いの大切さも実感できた。

最後に本郷消防署から、消防署への情報伝達の大切さ
 と消火器の取扱いに気をつけるよう講評をいただき、生
 源寺真一大学院農学生命科学研究科長から、まず火を出
 さないこと、火が出た場合落ち着いて行動することが大
 切であること等の話に引き続き、宮島篤分子細胞生物学
 研究所長から、消火器の設置場所や避難場所の確認と火
 災予防の徹底についての話があり、約400名が参加した
 訓練は無事終了した。



逃げ遅れた者をはしご車により救助する訓練



放水訓練（左端が本研究科の自衛消防隊）



粉末消火器を使った消火訓練

大学院農学生命科学研究科・農学部

「牧場公開デー」開催される

部局

右上の写真は、「牧場公開デー」当日、マジックペンとともに落書き用に用意した「〇〇」である。小さいお子さんから大人まで楽しんで落書きをしていた。落書きの中に「牧場大好き！いつまでも続けてね」とあった。公開デーを楽しみにしている市民がいることを確信し、地元根付いている証であることが感じられた。



落書き用に用意したもの何かな

今年で4回目となるが、年々参加者数も増加し充実した1日となった。

11月1日(土)当日は、雲ひとつない秋晴れの下スタートを切った。昨年に引き続き笠間市農政課職員のご協力を頂き、牧場側では上記の落書きコーナーの他、仔ヤギとのふれあい広場、ミルクの試飲コーナー、ぬり絵大会、牧場クイズラリーと午後は市民講座「狂牛病に罹らないプリオンK0牛：最先端バイオテクノロジーの利用」や乗馬体験など多彩なイベントを企画した。笠間市からは、地元産のコシヒカリ米やカブの漬物、焼き芋などの無償配布、更にゲームコーナーなど協力体制のもと、訪れた多くの市民も一体となり盛り上がった。イベント中に山口伸樹笠間市長も来場され、満悦された様子で牧場生産の生乳を味わいながら試飲されていた。



ぬり絵大会風景



山口伸樹笠間市長（左）と会談する眞鍋昇教授

さて、落書き用に使用した「〇〇」は、何なのかおわかりになりますか。牧場で生産している「ヘイレージ」です。直径・高さ共約 1.2m で牧草をラップフィルム（家庭で使用するラップのようなもの）で巻き取り、2～3ヶ月間乳酸発酵させた「草の漬物」です。これをウシやヤギの主食用として 1 年を通し与えています。牧場の面積は、東京ドームの約 8 倍（36.5ha）で、そのうち約 70% が牧草地です。秋に種を蒔き、翌年の 5 月から 8 月にかけて刈り取り、天候にもよりますが、毎年約 1,000 本（1 本 260kg 換算）のヘイレージを生産しています。

今後も職員一同一丸となり、健全な経営とともに、地元に着し市民から愛される牧場を目指して行きたい。

医科学研究所

技術職員研修（分子医科学・分子生物学関係）を開催

東京大学技術職員研修（分子医科学・分子生物学関係）が 11 月 5 日（水）～7 日（金）に医科学研究所で行われた。この研修は、医学部と医科学研究所とで毎年交互に開催されているもので、技術職員の実行委員を中心にテーマの選定や研修の企画・運営が行われている。今年は「共焦点顕微鏡を用いた細胞分裂のバイオイメーjing 技術」をテーマに、共焦点顕微鏡を使用した実習と関連する 5 つの講義が提供された。実習では、共焦点顕微鏡の特徴をいかして、多重染色した細胞を 3 次元的に観察したり、分裂期の細胞の動態を一晩かけてデータに取り込み、翌日解析ソフトを利用して経時的に再構成するという手法を、研修参加者が実際に手を動かして体験した。また、「レーザー顕微鏡の基礎」、「共焦点顕微鏡を利用したリンパ組織の微小環境と機能解析」、「マウス受精卵の分裂期染色体動態」、「共焦点レーザー顕微鏡の感染症分野での応用」、「ヒトの病気を科学するための実験病理学」と題する講義では、共焦点顕微鏡の基礎から応用までが紹介された。講義は、技術職員研修受講者以外にも、共焦点顕微鏡を実際に使用していたり、これから使おうと計画しているポスドク、大学院生、研究生、技術補佐員等からも多数の聴講があり、質疑応答も活発に行われた。参加者からは、「共焦点顕微鏡のいろいろな実例を紹介していただいたので、大変勉強になった」などの意見が寄せられた。



共焦点顕微鏡を使用した実習



大杉美穂准教授による講義



集合写真

大学院医学系研究科・医学部

医学部解剖体慰霊祭が行われる

11 月 7 日（金）14 時から、台東区谷中の天王寺において平成 20 年度医学部解剖体慰霊祭（解剖体数 118 体）が、ご遺族約 180 名、医学部関係教職員約 40 名及びこの春教養学部より進学し、初めて解剖実習に臨んだ医学科 3 年の学生など約 110 名の合計約 330 名参列のもとに

執り行われた。

本慰霊祭は、ご遺体を医学教育と医学の進歩発展のために捧げられた方々の御霊に感謝し、お慰めするため、ご遺族をはじめご縁故深い方々のご臨席を得て毎年実施されているものである。

住職以下7名の僧侶による読経が境内に流れた後、清水孝雄大学院医学系研究科長による祭文の朗読、焼香が行われ、ご遺族代表、教職員総代、来賓代表の焼香と続いた。学生代表として、医学科3年の大山博生さんの焼香に続き、参列者全員が焼香を行った。

本堂における行事を終えた後、千人塚において僧侶による読経が行われ、隣接する医学部納骨堂での焼香を行い散会した。



解剖体慰霊祭にて祭文を朗読する清水研究科長

史料編纂所

部局

国立大学附置研究所・センター長会議第3部会シンポジウムの開催

全国の国立大学附置研究所・センター長会議は、国立大学において幅広い研究を先端的に推進し、大学院教育等を通して研究者・技術者の育成を担っている研究所・センターが、意見交換や討議・討論を行う場であり、その第3部会は、人文・社会科学系の研究所・センターで構成されている。

本年度は、史料編纂所が第3部会シンポジウムを「戦争:過去と向き合う」と題して11月7日(金)10時から、情報学環・福武ホール ラーニングシアターにおいて開催した。

当日は降水確率が高いとの予報があり、参加者の出足が鈍ることが懸念されたが、幸いにもほとんど雨に降られることはなく、順調に実施された。

今回のシンポジウムは、人間の戦争観にとりわけ重要な意味を持つとして研究が進められてきた、過去の戦争の「経験」や「記憶」に焦点をあて、この問題の先端的な研究動向を紹介する趣旨であった。



あいさつする横山伊徳第3部会長

宮尾龍蔵神戸大学経済経営研究所長の司会により、次の3本の報告が行われた。

- (1) 現代アフリカと植民地戦争の記憶
報告者：永原 陽子氏
(東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所教授)
- (2) 日本中世の戦争の記録と記憶
報告者：高橋 典幸氏 (史料編纂所助教)
- (3) ロシア人とナポレオン戦争の記憶
報告者：越野 剛氏
(北海道大学スラブ研究センター共同研究員)



永原陽子氏からの報告

また、最後に京都大学人文科学研究所教授の山室信一氏が、3本の報告の総括をした。

「なぜ戦争は起こるのか」という重いテーマではあったが、決して後ろ向きな内容に終始することなく、示唆に富んだ発言が多く出された。

医科学研究所

動物慰霊祭行われる

部局

医科学研究所で、11月13日（木）11時から同研究所敷地内の動物慰霊碑前において、動物慰霊祭が執り行われた。医科学研究所では、数多くの動物が研究・実験に供され、医科学研究所の発展に大きく寄与している。当日は、清木元治所長の挨拶、佐藤宏樹実験動物研究施設長代理の報告があり、引き続き参列者が動物の霊に思いをいたし、献花を行った。動物を利用した研究に従事する研究者を中心に280名を超える教職員等が参列し、滞りなく終了した。



慰霊のことはを述べる清木所長



献花する参列者

医科学研究所

東大白金ひまわり保育園開園式を開催

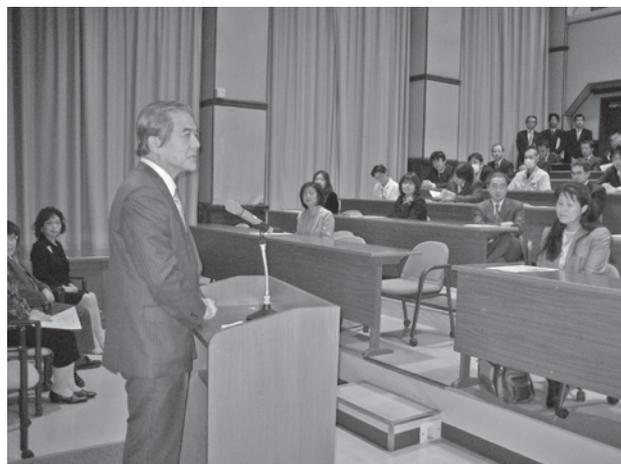
部局

11月14日（金）、医科学研究所1号館講堂において、東大白金ひまわり保育園開園式が執り行われた。本郷キャンパス以外では初めての保育園開園式ということもあり、約80名が出席した。

式では、小宮山総長、村嶋男女共同参画室長、清木医

科学研究所長から挨拶があり、保育園運営を託されたポピンズ・コーポレーションの中村代表取締役より祝辞があった。

その後、東大白金ひまわり保育園へ場を移し、小宮山総長が書した看板の上掲、大学院農学生命科学研究科附属演習林・秩父演習林から寄贈されたもみの木が敷地内に記念植樹された。小宮山総長は、同保育園の見学をした後、笑顔で園児らとの記念撮影に応じた。



小宮山総長の挨拶



上掲する看板を手に（右から辰野理事、村尾男女共同参画室環境整備部会長、小宮山総長、村嶋男女共同参画室長、清木医科研所長）



園児、関係者との記念撮影

大学院総合文化研究科・教養学部

三鷹国際学生宿舎で自衛消防訓練行われる

部局

11月8日(土)10時から、三鷹国際学生宿舎において、三鷹消防署の指導・協力により自衛消防訓練が行われた。

三鷹国際学生宿舎は、鉄筋コンクリート3階建て6棟から成り、現在教養学部在籍する学生及び留学生等約580名が入居している。建物は耐火建築であるが、宿舎の性格上火災等の防災には十分注意を払っており、その一環として万一の場合を想定し、年に1回自衛消防訓練を実施している。

当日は小雨の降るあいにくの天気ではあったが、留学生を含む宿舎生及び宿舎職員、警備員約50名が参加して実施された。

訓練は、宿舎生の居室から火災が発生したことを想定して、火災報知器の発報により、宿舎生、警備員、職員それぞれがどのように対応し安全に避難するかを確認する避難訓練から開始した。

その後、AED(自動体外式除細動器)の使用法の講習を含めた救命訓練、水入り消火器を使用する消火訓練の順に行った。

救命訓練では、人形モデルを使用しての人工呼吸、心臓マッサージ、AEDの使用という流れでの訓練を行ったが、少数のグループに分かれて訓練を行ったことにより、代表者のみが体験するという訓練ではなく、参加者全員が実際にAEDの使用、人工呼吸の実践という体験ができ、とても有意義な訓練となった。

最後に、今回指導をいただいた三鷹消防署より講評をいただき、訓練は終了となった。



人形モデルを使用しての救命訓練の様子

大学院教育学研究科・教育学部

大学院教育学研究科で外部評価実施される

部局

11月19日(水)に、大学院教育学研究科で、平成13(2001)年1月以来7年ぶり、法人化以後初めての外部評価が実施された。

今春より、外部評価の準備作業のための「自己点検評価委員会(委員長:金子元久研究科長)を組織し、1.教育活動、2.研究活動、3.学内の連携・協力・貢献活動、4.社会貢献、5.管理運営システム、6.評価・FD、7.国際の分野についての資料・データの収集・整理、アンケート調査等を行ったものを『外部評価基礎資料集』としてまとめ上げた。

表に示す8名(内1名外国人)の外部評価委員に、その『基礎資料集』の他、大学院教育学研究科・教育学部の公式発刊物を事前に送付した上で、当日を迎えた。

幸い天候にも恵まれ、外部評価委員には、午前中、授業見学が続いて諸施設(教育学研究科・教育学部本館、赤門総合研究棟2階部分、医学部1号館地下1階部分、弥生キャンパス総合研究棟3階部分、御殿下記念館)の視察をしていただき、山上会館で昼食の後、午後は『基礎資料集』に基づいて、各項目担当の教員からの説明・質疑の後、評価委員による協議を行った。教育学研究科としては、法人化以後、新コース・専攻の設置、専修を組み入れての組織の再編等が続け、教育・研究活動の充実のための努力が続けているが、『基礎資料集』の作成作業、外部評価委員の訪問による様々な観点からの率直な感想、意見、提言により、改めて振り返るべき点、解決すべき課題等が浮き彫りにされたことは確かであり、その意義は大きいものであった。

来春3月までには、協議の概要と外部評価委員の提言等も組み入れた報告書を編集・発刊した上で、3月18日(水)に公開シンポジウム『東京大学大学院教育学研究科・教育学部における教育、研究、社会貢献の課題』(仮題)を開催する予定である。

表 大学院教育学研究科・外部評価委員会委員

【国内】

- 安彦 忠彦 早稲田大学教育・総合科学学術院教授(特任)
- 潮木 守一 名古屋大学名誉教授(元桜美林大学教授)
- 大崎 仁 大学共同利用機関法人人間文化研究機構機構長特別顧問
- 小泉 英明 株式会社日立製作所役員待遇フェロー
- 河野真理子 株式会社キャリアネットワーク代表取締役会長
- 宮寺 晃夫 筑波学院大学教授
- 横山晋一郎 日本経済新聞社記者

【外国】

- 欧 用生 大同大学通職教育中心講座教授
(元台湾師範大学学長)

(五十音順、○委員長)



大学院授業（田中千穂子教授「臨床心理基礎演習」）の見学



外部評価委員による協議



外部評価委員と自己点検評価委員の記念撮影

求められる経営課題を検討することを研究目的としている（部門の研究成果や活動実績、メンバーなどについてはホームページを参照されたい。<http://web.iss.u-tokyo.ac.jp/jinzai>）

成果報告会は、研究成果を発表するとともに人材ビジネスにかかわる最新のトピックをとりあげ、人材ビジネス関係者と議論する場として、部門の設置以来毎年1回開催している。5回目にあたる今回は、研究成果報告・シンポジウム・懇親会の3部構成で、のべ264人の参加を得た（配付資料はホームページに掲載）。

第1部の研究成果報告では、部門に参加している社会科学研究所内外の研究者によって「人材ビジネスの市場と経営」「職業紹介担当者の能力開発の現状と課題」「職種別にみた派遣スタッフのキャリア形成」「派遣技術者の主体的なキャリア形成」「高齢者介護施設における派遣活用の現状と課題」の5つの報告が行われた。

第2部のシンポジウムは、「人材ビジネスの将来を拓く：業界・企業・行政の役割」と題して、派遣や請負にかかわる業界団体及び主要企業の代表、厚生労働省や経済産業省の担当課長など6人のパネリストの参加を得て行われた。それぞれが人材ビジネスの現状と課題、将来に関して報告したのち、人材ビジネスの果たすべき・果たしうる役割についての活発な議論が展開された。



第2部シンポジウム「人材ビジネスの将来を拓く」

社会科学研究所

人材ビジネス研究寄付研究部門の成果報告会を開催

部局

11月19日（水）、弥生講堂において、人材ビジネス研究寄付研究部門の成果報告会が行われた。

同部門は、株式会社スタッフサービス・ホールディングスの寄附金にもとづき2004年4月に3年間の時限で設置され、2007年4月にさらに3年間の時限で更新された。企業の人材活用の現状と課題を論理的かつ実証的に明らかにすること、さらにその研究成果をもとに、企業の人材活用ニーズを充足するうえで人材ビジネスに

史料編纂所



部局

史料編纂所前近代日本史情報国際センター公開研究会「歴史知識学の創成」を開催

史料編纂所附属前近代日本史情報国際センターは、11月22日（土）10時より、本郷キャンパス山上会館にて標記の公開研究会を開催した。当日は、松岡資明氏（日本経済新聞社）による基調講演「知識化研究の意義」のほか、センターの活動報告、センター教員および共同研究先企業の研究員による研究報告6本、情報学・歴史学双方の専門家による「歴史知識学」の可能性についての討論などがあり、参加者は約100名であった。

「歴史知識学」とは、歴史研究の素材である歴史資料（＝

史料)を対象に、情報学的手法を使って歴史的事項を抽出する方法論であり、一種の文理融合研究である。膨大な史料の中に散在する歴史情報を体系化し関連づけることで歴史研究の発展に寄与することが期待されている。情報学にとっても、「(歴史という)時間軸上の変化を含む非定型情報+定型情報を扱う先端的な面白さ」(堀浩一工学系研究科教授によるコメント)がある分野である。

本センターでは、史料編纂所が行っている史料の調査・研究、史料集の編纂・出版など一連の業務の流れの中に「歴史知識学」をどのように適用することが可能か、またそれがどのように有効に機能するかについて研究中有である。現在センターができて2年半であるが、今回の公開研究会を機に日頃から情報学・歴史学双方の手法について相互認識を深めておく必要性を改めて感じた次第である。



開会挨拶をする横山伊徳所長・センター長



討論の様子

＝ 特集テーマ&執筆部署募集告知＝ 特集の記事を 執筆してみませんか？

学内広報では巻頭特集の記事テーマとその執筆部署を募集しています。学内への周知を図るためのツールとして特集はとても効果的です。皆さんの部署でも、ぜひ特集の記事を執筆してみませんか？

1. 制作方法

① テーマの選定

全学の教職員を読者対象とするテーマを選定することとしています。まずは、本部広報グループに気軽にご相談ください。特集に馴染まないテーマでない限り、対応します。

(締切日の3週間前位までに一度ご相談ください)

② 内容・構成の決定

テーマが決まったら執筆部署と学内広報編集スタッフ(以下、編集スタッフ)が打ち合わせをしてページの内容を決めていきます。見開き2ページをひとつの単位とします。内容が盛りだくさんの場合は4ページ、または6ページで構成することもあります。

③ 原稿の執筆

決定した構成に合わせて執筆部署に原稿を書いていただきます。字数等は編集スタッフが提示します。原稿はWordファイルでご制作下さい。

④ ビジュアル要素の提供

特集に盛り込む写真・図・イラストを執筆部署から提供していただきます。手持ちの写真がない場合は編集スタッフが撮影にうかがいます。

(学外または他部署のホームページ等から写真・図・イラスト等を転用する場合は著作権に十分留意し、必ず先方の許諾を得てからご使用ください)

⑤ デザイン

お書きいただいた原稿、ご提供いただいた写真・図等を素材にして、編集スタッフがページデザインを作ります。もちろん、執筆部署でデザインを作っていたいてもかまいません。

⑥ 校正

デザインしたページイメージをお送りしますので、主に文字校正を行なっていただきます。

⑦ 完成

刷り上がった学内広報は、執筆部署に多めに配布します。

2. 締切日

あらかじめ、こちらから期日を申しますので、ご協力をお願いします。通常の学内広報の切日の**数日前**を原稿締切日とします。

3. 問い合わせ先・原稿提出先

本部広報グループ 広報企画チーム

TEL : 03-3811-3393 内線22031

E-mail : kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

平成20年11月1日現在 大学院学生・研究生・外国人研究生数調

研究科 名等	種別 課程別 入進学 年度	在籍者												在籍者のうち												特別 研究生																
		修士及び専攻				博士				課程				外国人学生(再掲)				休学者(再掲)				大学院																				
		20年度	19年度	18年度	17年度	20年度	19年度	18年度	17年度	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計																			
人文社会系	男性	59	59	52	38	18	166	129	295	57	34	62	45	66	35	146	110	331	224	555	850	12	24	27	44	107	8	7	111	73	199	27	33	60	5	3	8	0	1	1		
	女性	40	51	40	14	5	106	85	191	28	19	26	19	19	24	32	51	105	113	218	409	2	17	5	23	47	8	2	24	45	79	3	11	14	3	8	11	0	0	0		
教育学	男性	8	8	10	2	3	20	23	43	9	11	10	11	17	18	21	14	57	54	111	154	12	18	12	24	66	0	0	6	12	18	14	12	26	0	0	0	0	2	1	3	
	女性	13	48	14	7	1	100	28	128	18	4	20	10	22	5	50	6	110	25	135	263	6	13	1	3	23	6	1	48	5	60	2	0	2	4	0	4	0	0	0		
総合文化	男性	136	101	165	92	48	31	349	224	573	86	72	97	58	101	178	152	462	337	799	1,372	32	49	52	80	213	27	20	102	108	257	25	31	56	11	10	21	5	1	6		
	女性	66	261	69	20	5	570	140	710	136	33	146	31	149	26	82	23	513	113	626	1,336	12	3	22	10	47	10	2	15	6	33	3	2	5	14	1	15	11	7	18		
理学系	男性	886	120	858	112	62	9	1,806	241	2,047	234	63	220	45	207	42	118	32	779	182	961	3,008	190	90	274	96	650	35	6	48	11	100	79	26	105	16	7	23	10	4	14	
	女性	13	89	200	112	17	8	429	209	638	80	35	97	44	100	39	37	16	314	134	448	1,086	21	28	58	50	157	7	5	16	7	35	17	18	35	6	7	13	5	2	7	
農学生命科学	男性	-	-	-	-	-	-	-	-	-	13	5	9	5	14	7	11	4	49	22	71	71	-	-	11	8	19	-	2	2	4	3	6	3	6	3	2	5	1	0	1	
	女性	-	-	-	-	-	-	-	-	-	140	60	112	64	127	52	147	50	567	245	812	812	-	-	47	34	81	-	35	25	60	5	2	7	0	0	0	0	21	6	27	
医学系	男性	14	40	14	43	4	13	32	96	128	14	28	16	20	12	32	3	19	45	99	144	272	8	20	13	17	58	5	9	4	23	41	5	5	10	0	2	2	1	0	1	
	女性	12	7	11	8	1	2	24	17	41	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	41	3	2	-	-	5	0	1	-	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
薬学系	男性	78	33	61	33	4	0	143	66	209	41	11	44	5	42	10	6	2	133	28	161	370	4	5	10	6	25	4	3	4	1	12	1	0	1	0	1	0	1	7	0	7
	女性	43	0	42	1	4	0	89	1	90	20	1	16	1	15	2	7	0	58	4	62	152	8	0	7	1	16	1	0	1	1	3	1	0	1	3	0	3	1	0	1	
新領域創成科学	男性	370	134	354	98	23	9	747	241	988	92	39	116	35	105	34	58	26	371	134	505	1,493	49	39	64	29	181	18	7	12	13	50	9	12	21	5	4	9	0	0		
	女性	191	18	171	12	18	1	380	31	411	75	5	50	3	59	6	21	2	205	16	221	632	48	7	45	9	109	13	0	9	2	24	19	4	23	0	0	0	6	1	7	
情報理工学系	男性	63	32	37	35	15	16	115	83	198	24	11	19	16	22	9	26	14	91	50	141	339	16	32	16	12	76	5	3	11	7	26	13	26	39	1	0	1	1	0	1	
	女性	82	32	65	33	16	9	163	74	237	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	237	8	7	-	-	15	2	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
公共政策学	男性	2,457	760	2,342	733	277	121	5,076	1,614	6,690	1,067	431	1,060	412	1,077	396	986	541	4,190	1,780	5,970	12,660	423	347	664	446	1,880	147	66	448	341	1,002	226	185	411	72	44	116	71	23	94	
	女性	290	164	268	149	70	66	628	379	1,007	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1,007	14	12	-	-	26	10	-	-	20	-	-	-	-	6	9	9	13	6	19	

備考

1. 専門職学位課程は、〔 〕書きで示し外数である。
2. 農学生命科学研究科、医学系研究科の下段学生数は、平成16年度以前の入学者を示し、外数である。
3. 大学院研究生、特別研究生欄の()内は、外国人をなし内数である。
4. 外国人学生には在日外国人を含む。
5. 教育学研究科の大学院科目等履修生(47人)
6. 法学政治学研究科(法曹養成)の大学院科目等履修生(10人)
7. 工学系研究科の大学院科目等履修生(0人)
8. 薬学系研究科の大学院科目等履修生(23人)
9. 情報理工学研究科の大学院科目等履修生(2人)
10. 公共政策学教育部の大学院科目等履修生(10人)
11. 情報学環教育部研究生(148人)

連載第2回となりました「フロンティア生命科学」は、生命科学教育支援ネットワークが、学内の生命科学分野で活躍される先生方に、直接お話を伺って、これから生命科学の分野で研究を始めようとする学生の方はもちろん、この分野とは関係のない方まで、すべての人に生命科学の楽しさをお伝えすることを目的にした連載です。今回は、大学院農学生命科学研究科・農学部の正木春彦教授にお話を伺いました。

先生が研究者になるまでをお聞かせください



同期が優秀な人ばかりだったので、彼らと比較すると私の研究者としての出だしは、すこし遅かったと思います。修士、博士課程と徹夜で実験をすることもありましたので決して一生懸命でなかったわけではないのですが、今から考えると、その当時は研究というものが本質的にどういうものなのか、理解できていなかったんだと思います。そうこうしているうちに、博士課程の2年目で結婚をして、このあたりから少し考え方が変わってきたと思います。

当時、私の扱っていた現象に関して、学会では皆が合意している説明があったのですが、得られている事実を整理し、古い文献まで調べてみると、かなり貧弱な根拠をつなぎ合わせたモデルに過ぎないことが分かりました。偉い先生のこの説をひっくり返してやると面白いと考え、そのためにはどういった実験が必要かを考え、実行し始めて、あ！これが研究というものか、と実感できるようになったのを覚えています。

現在のご研究は、どのような内容でしょうか？

たとえば、自然界の土や水の中には、たくさんの種類の細菌がいます。ですが、これらのうち、実験室のペトリ皿でコロニーを作って培養できるのは、ほんの一部に過ぎません。ほとんどの細菌は、コロニーを形成しないのです。これまで実験室で、細菌が生きているという定義は、コロニーを作るとのことと同義でした。しかし、私たちの研究室では、特殊な培養方法を開発し、コロニーを形成できなかった微生物の培養に成功しています。こうしたことは、微生物が生きているという定義を根本から問い直す意味を持っていると思います。

私たちの体を構成する細胞や、その装置であるタンパク質分子の一つ一つは、正確なマイクロマシンとして機能していると考えられる人が多いようですが、大いに疑問です。タンパク質から出来ている細胞やその構成要素にまったくミスがないと考えるのは、熱力学的に無理があります。不完全な材料で巧妙な生命を作ったのが、進化だと思っています。個々の生命現象はかなり確率的に起こっていることも判ってきました。大腸菌は培養条件を決めると正確に一定時間後、たとえば30分で2倍に増えます。他の種でも時間は違いますが、2倍に増える時間は正確に決まっています。しかし、これは多数の細胞を巨視的にみているからであって、一つ一つに注目すると、数分で分裂する細胞もあれば60分でやっと1回分裂する細胞もあるということが、ある方の研究でわかっています。こうした現象の物理的な視点からの研究というのも重要だと思っています。

研究者を志す学生へのメッセージ

明らかな正解に向かってみんなで競争するのは、私には向いていませんでした。現象を自分の頭の中で丁寧に組み立て直してみると、一人一人頭と身体が違う以上、湧いてくる疑問も違う。何が根本問題でどういうアプローチをするべきか、研究はまさに芸術と似た自己表現だと思います。未熟なのは当たり前の世界。常識をひっくり返すようなチャレンジをして欲しいです。



生命科学教育支援ネットワークからのお知らせ

毎年春開催の「東京大学の生命科学」シンポジウムが、来年度は2009年5月2日（土）に安田講堂で開催されることに決定されました。6回目を迎えるこのシンポジウムでは、今回も生命科学教育支援ネットワークの15の部局から、選ばれた最先端の研究結果が公開されます。また、安田講堂ロビーにて各部局を紹介するブースも設置されますので、どの部局でそんな研究が行われているかを知って進学の参考にして下さい。プログラムは今後、学内広報でも公開予定です。

 東京大学生命科学教育支援ネットワーク
生命科学の教育・研究の横断的連携を目指して -

連絡先：03-5465-8974（内線48974）
info@lse.u-tokyo.ac.jp 駒場Iキャンパス17号館1階
http://www.lse.u-tokyo.ac.jp

「さすてなTimes」
第2弾！

サステナな日々

～キャンパスから考えるサステナビリティ～

vol. 10

サステナの産学連携～企業の立場から～

「大学と企業が組んで、エネルギーのサステナビリティを考えるなんて、何をしたらいいのから。」2007年2月、東京大学に「産学連携の仕事」で企業からやってきた担当者は不安のあまりつぶやいてしまったそうです。それから約2年の中で企業担当者が考えたサステナビリティと、それを産学連携で取り組むことの重要性、面白さ、大変さを語っていただきました。

■サステナビリティと企業

2000年以降、多くの企業が「サステナビリティレポート」と銘打ったCSR(企業の社会的責任)報告書を発行しています。かつて、企業は事業活動の経済性を重視した「年次報告書」を主として配布していました。その後「環境報告書」や「環境会計」が常識となり、地球温暖化対策、地球持続性の危機がメディアや政治課題の最大関心事となった今、「サステナビリティ」が企業活動にとっても欠かせないキーワードとなっています。

企業は、顧客にサービスや商品を提供し、利潤を追求するだけでなく、社会の持続可能な発展に資する役割を果たさなければ、事業活動を続けていくことができません。これは、ステイクホルダーの企業に対する目が、地球温暖化問題への関心の高まりを機に、「儲かっているか?」だけでなく、「社会貢献に積極的か?」「環境配慮は十分か?」「経営や管理体制に透明性が図られているか?」といった「企業の社会的責任」に対して特に厳しくなっているためです。企業が持続可能性(サステナビリティ)を追求するということは、長期的なビジョンを持ち、「法令遵守」「環境保全」「経済性」のすべてをバランスよく遂行し続けるということではないでしょうか。

■大学と企業が「サステナビリティ」で連携する

企業がサステナビリティを推進する際に重要なのは、自主的に取り組む(技術開発、社会活動の両面において)ことと、社会と連携・協働することです。たとえ世界中にネットワークを持つグローバル企業であっても、地球環境問題やサステナビリティといった、幅広くステイクホルダーのコンセンサスを得なければ解決できない課題は、社会と連携して取り組んでいかなければなりません。つまり、企業は情報を開示し、外部の様々な分野の有識者の意見を学び、研究者のデータや理論を理解し、さらに将来の人材の育成を支援していく必要があります。したがって企業のサステナビリティを考慮した事業活動においては、大学と連携することが、効率的で効果的であると考えます。これまで企業と大学が、個別研究テーマで共同研究を行うという連携は多くあります。それだけでなく「サステナビリティ」という長期的かつ広範な課題について、大学と企業が意見交換し情報共有を図ることで、それぞれが社会に対してより効果的な課題解決策を提示していくことができるのではないのでしょうか。

■東京大学IR3Sと昭和シェル石油の場合

昭和シェル石油は、その名の通り、石油製品を主として販売し利益を得て、社会活動を行う企業です。したがって、地球温暖化の原因として最有力候補のCO₂排出の源泉といわれても仕方ありません。一方で、その石油製品は、生活や事業活動の主要な動力源であり、また熱源であるため、「エネルギー」を供給する企業ともいえます。昭和シェル石油も一エネルギー企業として、サステナブルなエネルギーを安全で安定的かつ長期的に提供することが

サステナ(サステナビリティ; 持続可能性)とは?

環境の世紀と呼ばれる21世紀の科学技術、経済システムを語る最重要のキーワード。地球社会を持続可能なものへと導くビジョンを構築するための基礎となる新しい超学的な学術が「サステナビリティ学」(sustainability science)である。

サステナビリティ学連携研究機構(IR3S) HPより
<http://www.ir3s.u-tokyo.ac.jp/top.html>

このコラムは、サステナビリティ学を個人のライフスタイルやキャンパスと結びつけることを目指しています。

社会的責任であり使命であると認識しています。そのためには、低炭素社会を見据えた将来のエネルギー需給体制を把握しておかなければ生き残れません。そこで、「有識者」「研究者」「将来の人材」すべてがそろった東大IR3Sと、個別研究プロジェクトではなく、「エネルギーのサステナビリティ」という広範な課題について連携して取り組むことになりました。

2007年2月に東大IR3Sと昭和シェル石油で結成した「エネルギー持続性フォーラム」は、まず3年間で「エネルギーのサステナビリティ」という長期的なビジョンを検討し、政策提言することを目標としています。具体的には、テーマを決めてワーキンググループを立ち上げ、研究者の先生方とエネルギー持続性について意見交換する、エネルギー持続性をテーマとした公開シンポジウムを開催してオープンに大学と企業が意見交換する、サステナビリティ学教育プログラムでエネルギー会社との取り組みをケーススタディとして学生に紹介する、などの活動を行っています。来年2月に開催を予定している第3回公開シンポジウムの後には、全体を総括した報告書を提出する予定です。



■今後の課題ー連携の持続性について

連携活動の鍵は「継続すること」です。原油価格の変動、金融危機、景気減退、と社会状況は変化を繰り返しますが、いかなる状況においてもサステナビリティを追求するためには、様々な局面で適応し継続して取り組む連携体制であることが必要ではないでしょうか。意義のある連携であるためには、大学・企業、相互に、相手を必要とし補強し合う関係が理想でしょう。企業は資金だけでなく、情報や人材交流による付加価値をつけて産学連携に臨まなければならないと感じています。

■担当者の独り言

社会が刻一刻と変化する今、何事もスピードが重要です。ただ、息切れるようではサステナビリティは果たせません。大学にやってきたとき、理論構築と提案型の大学のアプローチと、結果の積み上げと実践型の企業のアプローチの違いに戸惑い、プロジェクトベースでない産学連携に疑問を感じました。しかしながら、対話を繰り返し、企業にとってのサステナビリティと大学との連携の意味を意識



するうちに、「アプローチが同じでは連携してもつまらない。違うアプローチ同士が連携するからこそ、サステナビリティという複雑な課題に対して、新しい解決策が生まれるのだ」と気がきました。あせらず、あわてず、あきらめず。サステナビリティ分野における産学連携はこの精神で持続的に進めるぞ、と担当者は今、心に誓っています。

サステナビリティ学連携研究機構(IR3S) :

北村奈美 特任准教授(エネルギー持続性研究担当)
(昭和シェル石油株式会社より出向)

問い合わせ先：本部研究機構等支援グループ(内線21387)

「ジェロントロジー」「サステナビリティ」 産学連携 趣旨提案会開催

産学連携に向けた活動へ始動

10月20日（月）、産学連携プラザにて、「ジェロントロジー」と「サステナビリティ」の産学連携趣旨提案会が開かれました。全学的な研究・教育を目的とする研究者との産学連携による課題解決の呼びかけは、第3期ABM（産学連携協議会アドバイザーボードミーティング）の大きな柱の1つに位置づけられているものです。異分野の知の融合、研究者と産業界の相互理解を深めるため、国際的な課題となっているジェロントロジーとサステナビリティをテーマ毎に研究会などを開催し、将来的には共同研究等へ発展させることを目指しています。

今後は準備会を発足させ、順調に進めば趣意書・規約案のとりまとめの後、複数企業に参加を呼びかける予定です。



秋山弘子教授

同日の提案会には20社の企業にご参加いただきました。総括プロジェクト機構ジェロントロジー寄付研究部門の秋山弘子教授、サステナビリティ連携研究機構地球持続戦略研究イニシアティブの住明正教授が研究概要を講演し、活発な質疑が交わされ、今後の進め方について企業側からの要望等をお聞きました。



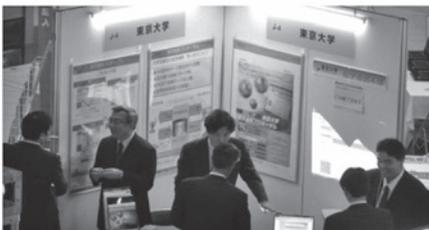
住 明正教授

産学連携本部は研究者の要請にもとづき産業界への提案会を随時開催いたします。ご希望の方は、下記にご連絡ください。

ビジネスフェア from TAMAに出展

11月6日（木）、（社）首都圏産業活性化協会などの主催による「第9回ビジネスフェア from TAMA」が新宿NSビルで開催されました。

同フェアは、地域企業の発展と地域経済の活性化を目的に行われているもので、産学連携本部が出展するのは、今年で3回目になります。



出展ブースで説明する産学連携本部職員

プロジェクトを使って産学連携プロポーザルのオンライン検索を実演、説明しました。

連絡先：産学連携本部（本部産学連携グループ）
電話：内線22857（外線03-5841-2857）
ホームページ：<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

「東京大学アントレプレナー道場」 最終発表審査会報告

最終発表審査会には7チームがエントリー ～10人が北京大学との交流プログラムに参加～

10月25日（土）、産学連携プラザで第4期「東京大学アントレプレナー道場」最終発表審査会が行われ、最優秀チームに数式の検索とWEB上の入力の事業化を提案した「Su」が選ばれました。道場に登録した学生は160名を超えましたが、今回は最終審査まで進んだ7チームの学生の9割以上を理工系の大学院生が占めたのが特徴的で、今後の文系学生、学部学生の活躍が期待されます。また今年度からの試みとして、最優秀1チーム、優秀2チーム、次点1チームの中から10人が11月6日（木）～8日（土）に中国で行われた北京大学ビジネスプランコンテスト学生チームとの交流プログラムに参加しました。



藤田審査委員長（産学連携本部長）から最優秀賞を授与される、チーム「Su」

審査のポイントは、①事業としての新規性、社会へのインパクトの大きさ②ビジネスプラン全体としての合理性・整合性③プレゼンテーション・スキル——の3点。最終審査会間近までメンターとプランを練ったチームもあり、各チームとも15分間のプレゼンでは密度の高い内容を披露し、審査委員からの鋭い質問にも動じず回答していました。その成果があって審査講評では、年々レベルが上がっている、夢や目標を持ってがんばって欲しいなどの期待が寄せられ、修了証を手に全員力を出し切った感が会場に伝わりました。



第4期生と審査委員、メンター、OBの皆さん

- 【最優秀賞】「数式の検索とWEB上の入力」Su 【参加チーム概要】
（代表：町野明徳 理学系研究科修士課程1年）
- 【優秀賞】「都心での農業体験サービス」LAI
（代表：後藤裕輔 農学生命科学研究科修士課程1年）
- 【優秀賞】「ボディライン改善サービス」ボディシェイプス
（代表：尾関紀篤 教養学部研究生）
- 【次点】「脳科学による行動ターゲティング広告」DBキャッチャー
（代表：木村栄輝 医学系研究科修士課程2年）
- ・「中学生・高校生の『夢』開拓事業」Life
（代表：中尾宏規 公共政策大学院修士課程1年）
 - ・「Work with Neighbors」ハフニウム
（代表：原田惇 工学部4年）
 - ・「てーぶるめーかー（Table Maker）」InStance
（代表：松久保健太 新領域創成科学研究科修士課程1年）

DUCR

検索

DUCR
Division of University Corporate Relations
The University of Tokyo



教科書『科学コミュニケーション論』

藤垣裕子
総合文化研究科 准教授
科学技術インタープリター養成プログラム担当

当プログラムの必修授業の1つ、科学コミュニケーション基礎論の授業用に整備した資料をもとに、10月に東大出版会より教科書「科学コミュニケーション論」を出版した。この本の企画プロセスと内容を紹介したいと思う。2005年度の終わりに当プログラムのポストドク(PD)およびリサーチアシスタント(RA)の方々と、『科学技術コミュニケーション基本論文集』を作成した。さまざまな雑誌上、書籍上に展開される科学コミュニケーション関連の論考を集めたもので、51編の論文のコピーからなり、厚さは4センチ近くある。この論文集を編むプロセスで、われわれは、科学コミュニケーションにかかわる論説が、白書、政府文書のほか、理科教育にかかわるもの、理系の専門家のアウトリーチ活動に関するもの、科学ジャーナリズムに関するもの、リテラシーに関するもの、科学技術社会論に関するもの、社会学のコミュニケーション論、メディア論にかかわるもの、などに分散しており、掲載されている場所も多岐にわたっていることに気付いた。上記のプログラムでこれらの文献を系統的に学習するためには、これら多岐にわたって分散している論考を一望のもとにレビューできる教科書がどうしても必要だと考えるようになった。そこで2006年度は、当プログラムのPD、RAの方々と専門誌『科学の公共理解(Public Understanding of Science)』の1992年創刊時から2006年まで300編あまりの論文を抄読する勉強会を設け、とくに欧州で活発な科学コミュニケーションの理論的モデルと実践の評価についての論文群にあたった。この抄読会をもとに、我々は、科学コミュニケーション論の興隆の分析、リテラシーの階層性、コミュニケーションモデルの多様性の分析を行い、日本における「科学コミュニケーションの興隆」を再チェックし、国際的な文脈から問い直しを行った。何故、日本でいま、科学コミュニケーションがさかんなのか、そして日本の科学コミュニケーション論はあるところに偏ってはいないか。もしそうだとするとそれは何故なのか。日本の科学コミュニケーションの特殊性は何によるのか、科学の移入の歴史か、市民参加や市民の意味の違いによるのだろうか。これらの勉強会をもとに、2007年度に章立てを考え、系統的に学習するための教科書としたのが本書である。まず、第一部では、欧州、米国、日本における科学コミュニケーションの歴史を対比した。これらをとおして、日本の科学コミュニケーションを国際的文脈から問い直しをする作業のための材料を整え、対比を考えられるようにしている。続いて第二部では、理論的なモデルのレビューを行った。第三部では、とくに実践とその評価に焦点をあてた。最後に第四部では、科学コミュニケーションの隣接領域である科学教育、市民参加、科学者の社会的責任と、科学コミュニケーションとの関係を吟味した。現在、多くの方々からの反応を得つつある。

★科学技術インタープリター養成プログラム
URL:<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/STITP/>



ケータイからみた東大
～東大ナビ通信～ No. 13



東大ナビとは？

学内外に向け携帯電話を通じて教育イベント情報をお届けするサービスです。携帯サイトで学術俯瞰講義や公開講座、学内で開催される教育イベント情報を宣伝します。

加えて、QRコードや空メール送信によりメールアドレスを登録した皆様の携帯電話に、最新の教育イベント情報を、メールマガジンで定期的にお届けします。学内教育イベントの情報収集・広報活動の媒体としてご利用頂けます。

是非、東大ナビをご活用ください！



イベント情報を受けたい方

mail@utnav.jpに空メール送信！

- この記事のQRコードから
- mail@utnav.jp宛てにメール送信
- 携帯サイトutnav.jpにアクセスしてメルマガ登録ページへ
- ※携帯電話・PCどちらからも登録可能



返信メールから登録画面に入力！

- ご所属
- 性別・年齢など



登録完了！

- 登録確認メールが届きます
- 隔週でメルマガ・お得なクーポンGET！



イベントを宣伝したい方

携帯・PCサイトで申し込めます

- <http://utnav.jp/>にアクセス
- イベント掲載フォームから送信！
- 追ってスタッフよりご連絡致します
- 教育企画室TREEオフィスまで！
- 内線；27823（重田）
- メール；info@tree.ep.u-tokyo.ac.jp
- オフィス；本郷キャンパス 第二本部棟401号室

コミュニケーションセンターだより No.54

■11月の出店はなんと3回もありました！

文京シビックセンターで行われた「文京博覧会2008」に、毎年恒例の「ホームカミングデイ」、「駒場祭」と、今月はイベントが盛りだくさんでした。駒場祭の最終日には雨が降ってしまい少し残念でしたが、全ての出店において非常に盛り上がり、楽しいイベントとなりました。大きな声で宣伝をしたり、お客様との会話を楽しんでいるスタッフを見ていると、本当にイベントの魅力を感じます。次回の出店は卒業式です。今から皆楽しみにしています。是非UTCCテントで頑張っているスタッフを見にいらして下さい。



〈文京博覧会2008の様子〉



〈駒場祭の様子〉

■スタッフおすすめ商品のご紹介

はじめまして。UTCCスタッフの上山です。僕のお勧め商品は「御酒」です。UTCC開店当初より、多くのお客様にご愛飲頂いている研究成果商品の泡盛ですが、11/15よりエッチング(名前やメッセージをボトルに彫りこむこと)を始めました。卒業等のお祝いをはじめ、お歳暮・お中元など、日頃お世話になっている方や大切な方に、世界に一つだけのメッセージ入り御酒はいかがでしょう。僕も研究室の先生方にプレゼントしようと考えています。店頭に見本がございますので是非いらして下さい。

工学部社会基盤学科 4年
上山 聡エッチングしたボトルのサンプル
〔御酒 陶器ボトル (720ml) 〕

(担当：コミュニケーションセンター 山下)



東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

The University of Tokyo

OPEN：月曜～土曜 10：30～18：30

電話：03-5841-1039

http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp

※ 12/27(土)～1/4(日)は冬季休業とさせていただきます。

ワタシのオシゴト / 第34回

Rings around the UT

地震研究所庶務チーム

倉光 知恵さん

地震とカエルの大移動の関係…！？



小規模噴火中の浅間山の観測点付近で(8輪駆動車ARGOとともに)

現在私がいる地震研1号館は、積層ゴムを使用した免震構造等により、首都圏直下の地震が起きても、継続的に防災研究拠点としての機能を維持できるように建てられています。地震研は各地に観測所や観測点があり、研究はフィールドワークと密着しています。その出張関係(大地震が起きると増えます…)や勤務時間管理などが主な仕事ですが、「地震雲が出ているが…」「地震とカエルの大移動の関係は？」などなど研究内容とは直接関係の無い電話応対もあり、世の中の地震に対する関心の高さを日々感じたりもしています。先日、浅間山の観測所、観測点で、研究の現場を直接見る機会があり、最先端の研究を裏方から支えたいと志していた〇年前の初心を(久しぶりに！？)思い出しました。地震研に配属になってまだ8ヶ月で、皆様に教わるばかりの毎日ですが、自分に求められていること、できることを考えながら頑張っていきたいと思っています。



事務部のホームページを作成し、第一回地震研究所長賞を受賞しました

得意ワザ：寝起きと寝つきがよいこと

自分の性格：タフ

次回執筆者のご指名：川名由希子さん

次回執筆者との関係：病院事務当直室から始まり、美容院、異動先などで縁が。

次回執筆者の紹介：ノリノリ時々マシンガントーク？
明るい方です！

INFORMATION

募集

募集

大学院農学生命科学研究科・農学部

里山フィールドサイエンス推進プログラム（東京大学秩父演習林黒石試験地長期占有利用）募集のお知らせ

大学院農学生命科学研究科附属演習林・秩父演習林では、当演習林が保有するおよそ2haの里山林（旧薪炭林・造林地）を長期的に利用して、里山林の管理に関する研究および教育を行う団体を募集します。優れた研究・教育プログラムに対し、市街地近郊二次林の長期的な占有利用を許可し、事業遂行上必要な作業や機材を積極的に提供するなどの支援を行うことにより、里山林の有効活用を推進するのがねらいです。募集要項、利用規約等詳細は、秩父演習林のホームページ

<http://www.ufa.u-tokyo.ac.jp/chichibu/>
をご覧ください。

●お問い合わせ先

秩父演習林企画調整係 Tel: 0494-22-0272

お知らせ

お知らせ

退職教員の最終講義

学内広報では、今年度末をもって本学を退職される方々の最終講義のお知らせを掲載します。

大学院法学政治学研究科・法学部

大沼 保昭 教授

（国際法）

日時：2009年1月28日（水）18:00～19:00

会場：駒場キャンパス講堂（900番教室）

演題：「国際法の意義と問題—社会における法の価値と害悪—」

大学院工学系研究科・工学部

鈴木 博之 教授

（建築学専攻）

日時：2009年2月3日（火）15:00～

会場：情報学環・福武ホール

演題：「建築：未来への遺産」

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

「教養学部報」第516（12月3日）号の発行—教員による、学生のための学内新聞—

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、15号館ロビー、図書館ロビー、生協書籍部、保健センター駒場支所で無料配布しています。バックナンバーもあります。

第516号の内容は以下のとおりとなっていますので、ぜひご覧ください。

三谷博：日本の大学は世界の中にあるのか

和田純夫：標準理論、そしてその先—小林益川理論をめぐって

山本巍：〈駒場をあとに〉後は野となれ山となれ

今井知正：山本巍先生を送る

鹿兒島誠一：〈駒場をあとに〉駒場村での三十年

小宮山進：鹿兒島誠一先生を送る

大築立志：〈駒場をあとに〉駒場からの旅立ち

工藤和俊：大築先生を送る—「巧みさ」への道—

中澤英雄：山下肇先生を偲ぶ

兵頭俊夫：小出昭一郎先生追悼

長谷川寿一：駒場 バラの小径

お知らせ

保健センター

年末年始の診療日程のお知らせ

年末年始は下記のとおり業務を行います。

	本郷支所	駒場支所	柏支所
12/25 (木)	通常どおり	午後休診	通常どおり
12/26 (金)	午後休診		
12/27 (土) ~ 2009 1/4 (日)	休 診		
1/5 (月)	午後休診		
1/6 (火)	通常どおり	午後休診	通常どおり

注)・各支所ごとに診療日程が異なりますのでお気をつけください。

- ・原稿締切後に診療日程が変更となっている場合がありますので来所する前に必ず本センターホームページ、電話等で日程をご確認ください。

URL : <http://www.hc.u-tokyo.ac.jp/>

お知らせ

本部広報グループ

広報センター 年末年始休館のお知らせ

今年も、受験生や学校見学・歴史探訪・広報誌収集など、8千人以上のお客様にご利用いただきました。また、学内の方々には、閲覧資料提供のご協力を賜り心よりお礼申し上げます。来年もどうぞよろしくご指導・ご鞭撻のほどお願いいたします。

下記のとおり、休館させていただきます。

12月26日(金)～1月5日(月)

*年始は、1月6日(火)10時より開館いたします。

お知らせ

本部学生支援グループ

アウトリーチ活動のポータルサイトオープン!

昨年11月に行われた「学生企画コンテスト(東京大学130周年記念事業)」にて優秀賞を獲得し、今年度企画を実施している「東京大学アウトリーチイニシアティブ(略称UtoI)」は、1月にオープンを目指したウェブサイトを現在準備しています。

このサイトは、高校生など学外の方々に対して行って

いる体験授業や出張授業などのアウトリーチイベントを紹介するポータルサイトとなる予定です。現在、このサイト上でイベント紹介などを共に行うパートナー団体を募集しています。東京大学の教職員を含む(推薦者でも構わない)団体であれば、自分たちの団体の紹介ページとともにイベントやニュースの告知が可能となります。関連する団体の方々にはぜひご検討ください。

また、これに先立ち11月22日(土)には科学技術振興機構が行っているイベント「サイエンスアゴラ」にてUtoI主催で「大学アウトリーチの可能性」と題したシンポジウムを開催しました。各部局でアウトリーチ活動を行っている内田麻理香先生(工学部・特任教員)、大木聖子先生(地震研究所・助教)、横山広美先生(理学系研究科・准教授)の御三方をゲストスピーカーに迎え、それぞれの活動紹介とパネルディスカッションを行いました。

会場は立ち見が出るほど盛況で、時間が過ぎてもやまないほど、会場からの質問や活発な議論が行われました。



サイエンスアゴラでのシンポジウムの様子

お知らせ

放射光連携研究機構

日本放射光学会創立20周年記念事業市民公開講座「夢の光が未来を拓く」

放射光連携研究機構では、放射光科学の成果の一端とその社会的有用性を広く知らせるために、以下の通り市民公開講座を開催します。多くの方のご来場をお待ちしています。

日時 2009年1月10日(土) 13:30～17:00

場所 安田講堂

内容

13:30～ 市民公開講座

「新しい超伝導体を追い求めて」

秋光 純(青山学院大学理工学部 教授)

【講演概要】

「超伝導」は「超電導」とも書き大変奇妙な性質を持っています。例えば超伝導体の中では電気抵抗は全く生じません。実際超伝導体に電気を流すと、抵抗がないため

電流が減衰せず、永久に電流は流れ続け、恐らく地球が減びるまで流れ続けるだろうと言われています。リニア新幹線を動かすリニアモーターの材料としても大きな期待が寄せられており、より高い温度で超伝導を示す材料の発見に多くの研究者がしのぎを削って研究をしています。超伝導物質を見つけた時に、真っ先に知りたい情報は、その物質が、どんな原子配列をしているかということです。そこから新たな超伝導の材料の発見の鍵も生まれてきます。放射光はそのための素晴らしい強力な「武器」の一つです。それがいかに役に立っているかを分かりやすく述べていただきます。

「安全安心な社会のために」

二宮 利男 (元 兵庫県警察刑事部科学捜査研究所 所長)

【講演概要】

放射光は、市民の皆様が安全で安心な生活を営むための社会的基盤を確立するためにも利用されています。たとえば、科学捜査における重要な証拠資料の鑑定に利用するシステムが確立され、随時利用されはじめています。最近では、社会問題となっている、農産物や食品の産地偽装に関係して、産地を特定するための産地出来成分の詳しい分析なども行われています。これらの安全・安心な社会のための研究の一端をご紹介します。

「バイオとナノマシンの融合」

難波 啓一 (大阪大学大学院生命機能研究科 教授)

【講演概要】

多くの細菌はべん毛をらせん状のプロペラとして回転させて泳ぎ回ります。べん毛は太さ20ナノメートルで、体長2ミクロンほどの菌体から十数ミクロンにも伸びます。根元には40ナノメートル程の回転モーターがあり約300Hzで回転します。そのべん毛の束を巧みにあやつって、動く方向をコントロールしています。この約30種類の蛋白質からなるべん毛が作られていくしくみや、一種類の蛋白質からなるチューブ状構造体が曲率を生じるしくみ、モーターが働くしくみとは？物理学的にも大変興味深い超分子ナノマシンの動作機構が、極低温電子顕微鏡や放射光X線による立体構造解析により少しずつ解り始めています。

15:50 ~ 記念式典

挨拶 雨宮 慶幸 (日本放射光学会 会長)

祝辞 小宮山 宏 (東京大学 総長)

祝辞 文部科学省 (予定) 他

挨拶 佐々木 泰三 (日本放射光学会 元会長)

参加費 無料

事前登録は下記ウェブサイトからお願いいたします。

<http://www.jssrr.jp/20symposium/>

放射光連携研究機構ホームページ

<http://www.oshimalab.t.u-tokyo.ac.jp/SRRI/index.html>



お知らせ

本部国際連携グループ

査証(ビザ)を取得せずにアメリカへ入国を予定されている皆様へ

2009年1月12日(月・祝)より、査証(ビザ)を取得せずにアメリカへ空路及び海路で入国される方で、ESTAの登録を行われていない方は、航空機の搭乗や乗船によるアメリカへの入国ができなくなります。

米国国土安全保障省(DHS)によると、2009年1月12日以降に査証(ビザ)を取得せず(ビザ免除プログラム(注1))にアメリカ入国を予定している方は、事前にESTA(電子渡航認証システム)でWEB上の登録を行い、認証を受けることが必要になります。

ESTAは2008年8月1日から稼働しており、2009年1月11日までのアメリカ入国をされる方は任意申請となりますが、2009年1月12日以降で渡航が確定している方は、できる限り早めの登録をお願いします。

なお、ビザ免除プログラム参加国籍は、(注2)のとおりです。ビザ免除プログラム参加国籍以外の方は、従来通りアメリカビザを取得する必要があります。

※ESTA登録手続き及び詳細は以下のアメリカ大使館サイトを参照ください。

登録画面 <https://esta.cbp.dhs.gov/>

(日本語の画面選択も可能です。)

Q & A

<http://japan.usembassy.gov/j/visa/tvisaj-estageneralfaq.html>

ESTA 登録手続きに関する相談については、学内ビザコンサルティングサービス（行政書士法人IMS）でも受付けています（無料）。

(注1) ビザ免除プログラム (VISA WAIVER PROGRAM: VWP) とは、アメリカ入国審査に際しアメリカビザをお持ちでなくても、ビザ免除プログラム参加国籍でパスポート及び往復の航空券を所持されている方で、観光及び商用目的での90日以内の滞在は、ビザなしで入国審査を受けることができる制度。

(注2) 2008年11月17日現在のビザ免除プログラム参加国は、日本、アンドラ、オーストラリア、オーストリア、ベルギー、ブルネイ、デンマーク、フィンランド、フランス、ドイツ、アイスランド、アイルランド、イタリア、リヒテンシュタイン、ルクセンブルグ、モナコ、オランダ、ニュージーランド、ノルウェー、ポルトガル、サンマリノ、シンガポール、スロベニア、スペイン、スウェーデン、スイス、英国、エストニア、ハンガリー、韓国、ラトビア、リトアニア、チェコ、スロバキア

【通知に関するお問い合わせ】

本部国際連携グループ

内線：20263、20299

E-Mail: intre@adm.u-tokyo.ac.jp

【ESTAに関するお問い合わせ】

アメリカ大使館

E-Mail: ESTA@cbp.dhs.gov

行政書士法人IMS

〒105-0003 東京都港区西新橋2-18-1 弁護士ビル2号館7階

TEL: 03-5402-6191 / FAX: 03-5402-6192

E-Mail: info@attorney-office.com

お知らせ

情報基盤センター

“情報探索ガイダンス” 各種コース実施のお知らせ

レポート・論文の執筆や、ゼミ発表の準備の際、どのようにして必要な文献を入手していますか？文献探して困ったことはありませんか？

情報基盤センター図書館電子化部門では、“情報探索ガイダンス” 各種コースを実施しています。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どな

たでも参加できます。ぜひご参加ください。

●会場：

本郷キャンパス 総合図書館1階 講習会コーナー
(先着12名。予約不要。直接ご来場ください。)

●日程・コース概要：

■1月16日(金)15:00～16:00 自宅から検索するには？

自宅からも文献検索したいと思いませんか？このコースでは、学内・学外を問わず利用できる無料公開のデータベース・電子ジャーナルや、ECCSアカウントによる認証で学外から利用可能になるサービスなどを紹介します。

■1月20日(火)12:00～13:00 文献検索早わかりコース

図書や電子ジャーナル、雑誌論文、新聞記事など、各種の文献検索方法を、まとめてコンパクトに解説します。

■1月26日(月)15:00～16:00 日本の論文を探すには？

日本国内の雑誌論文、どうやって検索していますか？このコースでは、代表的なデータベース、CiNii (サイニイ) の使い方を中心に解説します。

■1月28日(水)15:00～16:00 電子ジャーナルを利用するには？

電子ジャーナルを使えば、欲しい論文の本文がWebで簡単に見られます。このコースでは、代表的な学術出版社の電子ジャーナルサイトを例にとって実際の利用方法を解説します。また、“UT Article Link” を使ってデータベース検索結果から電子ジャーナルへアクセスする方法も紹介します。

●参加費：無料

●問い合わせ：

学術情報リテラシー係

TEL: 03-5841-2649 (内線：22649)

E-mail: literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

●出張講習会、随時受付中です！

授業やゼミなどに、出張します。ご希望の日時、会場、内容、人数、連絡先を、メールで上記までご連絡ください。(無料)

ご希望の内容・レベルに合わせて、講習します。

(<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/shuccho.html>)

お知らせ

本部学生支援グループ

年末年始の体育施設の使用及び受付について

窓口受付業務は12月26日（金）から1月4日（日）まで休止します。
これに伴い、体育施設の使用及び受付は下表のとおり行います。

体育施設名	使用休止期間	予 約 受 付	
		対象期間	受付開始日
二食横 / 農学部 テニスコート ※1	12月29日（月） ～1月4日（日）	1月12日（月） ～1月14日（水）	1月5日（月）
農学部グラウンド		2月分	1月6日（火）
検見川総合運動場 ※2	12月26日（金） ～1月4日（日）		学内者 12月19日（金） 学外者 1月5日（月）
柏Ⅱ ラグビー場	12月26日（金） ～1月4日（日）		1月5日（月）～
保健体育寮	12月24日（水） ～1月3日（土）		
二食地下プール	12月25日（木） ～1月4日（日）		
御殿下記念館 ※3	12月27日（土） ～1月5日（月）		運動部・Aクラブ優先予約 12月1日（月） Bクラブ第1順予約 1月1日（木） フリー予約 1月6日（火） ※5
御殿下グラウンド ※4			

- ※1 1月5日（月）～1月7日（水）分の予約日は12月25日（木）となります。
- ※2 12月26日（金）は館内清掃を行うため、12時から閉館となります。
- ※3 12月27日（土）は館内清掃を行うため、15時から閉館となります。
- ※4 年末年始の鍵の貸し借りは警備室で行います。なお、同期間は専有予約以外の方の利用はできません。
- ※5 御殿下記念館・グラウンドの予約はオンラインのみです。

問い合わせ先：本部学生支援グループ体育チーム（内線 22509 ～ 22511）

お知らせ

本部入試グループ

平成 21 年度入学者募集要項配付

平成 21 年度の本学の入学者募集要項が決定し、11 月 15 日（土）から入学志願者に配付されている。

募集要項配付場所

「本郷地区」

正門、赤門、広報センター（龍岡門）、コミュニケーションセンター（赤門脇）、東大生協（安田講堂売店、書籍部）

「弥生地区」

農学部正門

「駒場地区」

教養学部正門、コミュニケーションプラザ北館 1 階生協購売部

※ 東京大学ホームページからも請求できる。

テレホンサービス

募集要項の請求方法（郵送）、出願状況（出願者数及び倍率）並びに追加合格の有無等について、テレホンサービス（電話番号：03-3818-9900）を行う。

募集人員、試験期日、試験場、合格発表日などは次のとおりである。

募集人員

募集人員（人）		前期日程（人）	後期日程（人）
文科一類	3,053	401	100
文科二類		353	
文科三類		469	
理科一類		1,108	
理科二類		532	
理科三類		90	
計	3,053	2,953	100

※現在、理科三類の 8 人の募集人員増（90 人から 98 人）について、文部科学省に認可申請中であり、変更があり得る。なお、認可後あらためて本学ウェブサイト等で周知する。

出願期間

平成 21 年 1 月 26 日（月）～平成 21 年 2 月 4 日（水）まで

試験日

前期日程 平成 21 年 2 月 25 日（水）・26 日（木）

後期日程 平成 21 年 3 月 13 日（金）

試験場

前期日程

科 類	試験場
文科一類	東京大学 教養学部
文科二類	
文科三類	
理科一類	東京大学
理科二類	法・文・経済・教育・
理科三類	薬・医・理・工・農の各学部

後期日程

科 類	試験場
全科類 (理科三類を除く)	東京大学 法学部

合格者発表

○第 1 段階選抜合格者発表

前期日程

平成 21 年 2 月 11 日（水）13 時ごろ、本郷地区キャンパス内（弓道場前）に合格者の大学入試センター試験「試験場コード」及び「受験番号」を掲示する。

後期日程

平成 21 年 3 月 10 日（火）13 時ごろ、本郷地区キャンパス内（弓道場前）に合格者の大学入試センター試験「試験場コード」及び「受験番号」を掲示するとともに、合格者には電子郵便（レタックス）により「合格通知書」を、また、不合格者には、「不合格通知書」を送付する。

○合格者発表

前期日程

平成 21 年 3 月 10 日（火）13 時ごろ、本郷地区キャンパス内（弓道場前）に合格者の第 2 次学力試験受験番号を掲示するとともに、合格者には電子郵便（レタックス）により「合格通知書」を送付する。

後期日程

平成 21 年 3 月 22 日（日）13 時ごろ、本郷地区キャンパス内（弓道場前）に合格者の第 2 次学力試験受験番号を掲示するとともに、合格者には電子郵便（レタックス）により「合格通知書」を送付する。

お知らせ

本部入試グループ

平成 21 年度入試に伴う臨時措置（本郷キャンパス）について

I 平成 21 年度大学入試センター試験及び第 2 次学力試験（前期日程）の実施に伴う入構制限等の臨時措置（本郷関係）について

平成 21 年度の大学入試センター試験（平成 21 年 1 月 17 日（土）、18 日（日））及び第 2 次学力試験 前期日程（平成 21 年 2 月 25 日（水）、26 日（木））の実施のため、次のとおり入構制限等の臨時措置をとることとする。

1. 授業の休止

(1) 大学入試センター試験

平成 21 年 1 月 16 日（金）

試験場準備のため、試験に使用する教室について、原則として午後の授業は休止する。

(2) 第 2 次学力試験（前期日程）

平成 21 年 2 月 24 日（火）

試験場準備のため、試験に使用する教室について、原則として午後の授業は休止する。

平成 21 年 2 月 25 日（水）、26 日（木）

試験当日のため、授業は休止する。

2. 試験場区域

試験場区域を次のとおり設定する。

(1) 本郷区域（本郷地区から本部棟・附属病院・第二食堂建物・環境安全研究センターを除く区域）

(2) 農学部区域（弥生地区から地震研究所・農学部グラウンド・野球場を除く区域）

(3) ただし、大学入試センター試験にあつては、「(1) 本郷区域」のみとし、(1) 及び (2) の区域に通じる陸橋は封鎖する。

3. 入構制限等

(1) 入構許可

試験当日は、「受験者」、「本学教職員」、「研究のために特に入構を必要とする本学学生・研究生」及び「特に入構を許可された者」は入構できるが、その他の者の試

験場区域への入構は禁止する。なお、入・出構の際は、警備担当者の指示に従うこと。また、試験場区域においては、試験の妨げにならないよう静粛にすること。

(2) 「身分証明書」の提示

入構に際しては、次のとおり「身分証明書等」を提示するものとする。

① 「本学教職員」……………「身分証明書」

※ 「入試実施本部関係教職員」は、「入試統一腕章」を着用する。

② 「研究のために特に入構を必要とする本学学生・研究生」……………「学生証・研究生証」

③ 「特に入構を許可された者」……………「入試特別入構証」
※ 「入試特別入構証」は、大学入試センター試験用及び第 2 次学力試験（前期日程）用の 2 種類とする。

4. 試験場区域への入・出構は、次によるものとする。

(1) 本郷区域

① 「本学教職員」、「研究のために特に入構を必要とする本学学生・研究生」及び「特に入構を許可された者」
正門、赤門、弥生門、薬学ゲート、理学部 1 号館と化学館裏の間、二食ゲート

② 「受験者」

正門、弥生門、薬学ゲート、理学部 1 号館と化学館裏の間、二食ゲート

ただし、大学入試センター試験にあつては、二食ゲートは使用できない。なお、赤門からの入構は正門の混雑時及び雨天、降雪時に限り中央実施本部の判断により行う。

(2) 農学部区域

① 「本学教職員」、「研究のために特に入構を必要とする本学学生・研究生」及び「特に入構を許可された者」
農正門及び南門

② 「受験者」

農正門

(3) 上記の各門及びゲート以外からの立ち入りを禁止する。

なお、龍岡門及び池之端門は平常通りとする。また、懐徳門と西片門は封鎖する。

備考

1. 報道関係者等

「報道関係者等」は、腕章による識別ではなく、広報委員長の発行する「入試特別入構証」により入構を認める。

なお、報道関係者等への対応は広報委員会を通じて行う。

2. その他

(1) 試験場区域への車両による入・出構は、原則として認めないが、やむを得ない事由のある者の入・出構は、薬学ゲート、二食ゲート及び弥生門、農正門とする。但し、オートバイについては、エンジンを切った場合のみ入・出構を認める。

(2) 附属病院の業務は平常通りとなっており、附属病院の業務に関連して、試験場区域に入構する必要がある場合には、「教職員」については「身分証明書」、「学生・研究生」については「学生証・研究生証」、「その他の者」については「入試特別入構証」を必ず提示すること。

II 平成21年度第2次学力試験（後期日程）の実施に伴う入館制限等の臨時措置（本郷構内）について

第2次学力試験 後期日程(平成21年3月13日(金))の実施のため、次のとおり入館制限等の臨時措置をとることとする。

1. 授業の休止

第2次学力試験（後期日程）

平成21年3月12日（木）

試験場準備のため、試験に使用する教室について、原則として午後の授業は休止する。

平成21年3月13日（金）

試験当日のため、授業は休止する。

2. 試験場

法文1号館

3. 入館制限等

試験当日は、試験場を設定した当該建物への「受験者」及び「入試関係教職員」以外の立ち入りは原則として禁止する。

4. 試験場への入館

「受験者」及び「入試関係教職員」の出入口については、各建物の指定された場所とする。

備考

1. 報道関係者

報道関係者の入館及び構内での取材については、広報委員会を通じて行う。

III 平成21年度第2次学力試験合格発表（前期日程）の実施に伴う車両通行規制の臨時措置（本郷関係）について

平成21年度の第2次学力試験 前期日程合格発表（平成21年3月10日(火)）の際、受験者等の安全確保のため、次のとおり通行規制の臨時措置をとることとする。

1. 規制区域

医学部本館前ロータリー～赤門～正門

2. 規制時間 11:00～15:00

3. 規制車両

自動車及びオートバイ（合格発表関係車両を除く）

4. 注意事項

上記2の規制時間帯以外でも、車両での通行の際は、受験者等の安全確保を第一に考え、通行すること。

お知らせ

本部入試グループ

平成21年度入試に伴う臨時措置（駒場関係）について

○平成21年度大学入試センター試験及び第2次学力試験（前期日程）の実施に伴う入構制限等の臨時措置（駒場関係）について

平成21年度の大学入試センター試験（平成21年1月17日（土）・18日（日））及び第2次学力試験前期日程（平成21年2月25日（水）・26日（木））の実施のため、次のとおり入構制限等の臨時措置をとることとする。

1. 授業の休止

(1) 大学入試センター試験関係

平成 21 年 1 月 16 日 (金)

試験場準備のため、原則として午後の授業は休止する。

(2) 第 2 次学力試験 (前期日程) 関係

駒場キャンパスにおける授業ならびに学期末試験は終了しているため、この措置はとらない。

2. 試験場区域

試験場区域を別図のとおり設定する。入試当日は黄・黒のロープによって、その境界を明示する。

3. 入構制限等

(1) 入構許可

試験当日は、「受験者」、「本学教職員」、「研究のために特に入構を必要とする本学学生・研究生」及び「特に入構を許可された者」は入構できるが、その他の者の入構は禁止する。なお、試験場区域においては、試験の妨げにならないよう静粛にすること。

(2) 「身分証明書」の提示

入構に際しては、次のとおり「身分証明書等」を提示するものとする。

① 「本学教職員」……「身分証明書」

② 「研究のために特に入構を必要とする本学学生・研究生」……「学生証・研究生証」

③ 「特に入構を許可された者」……「入試特別入構証」

(3) 受験者の入・出構は、大学入試センター試験及び第 2 次学力試験 (前期日程) とともに、正門のみとする。

(4) 「本学教職員」、「研究のために特に入構を必要とする本学学生・研究生」及び「特に入構を許可された者」の入・出構は、正門 (バレーコート脇含む) 及び坂下門横とする。

(5) 入試当日、西門・北門 (野球場門)・裏門・炊事門・梅林門は閉鎖する。

備 考

1. 報道関係者等

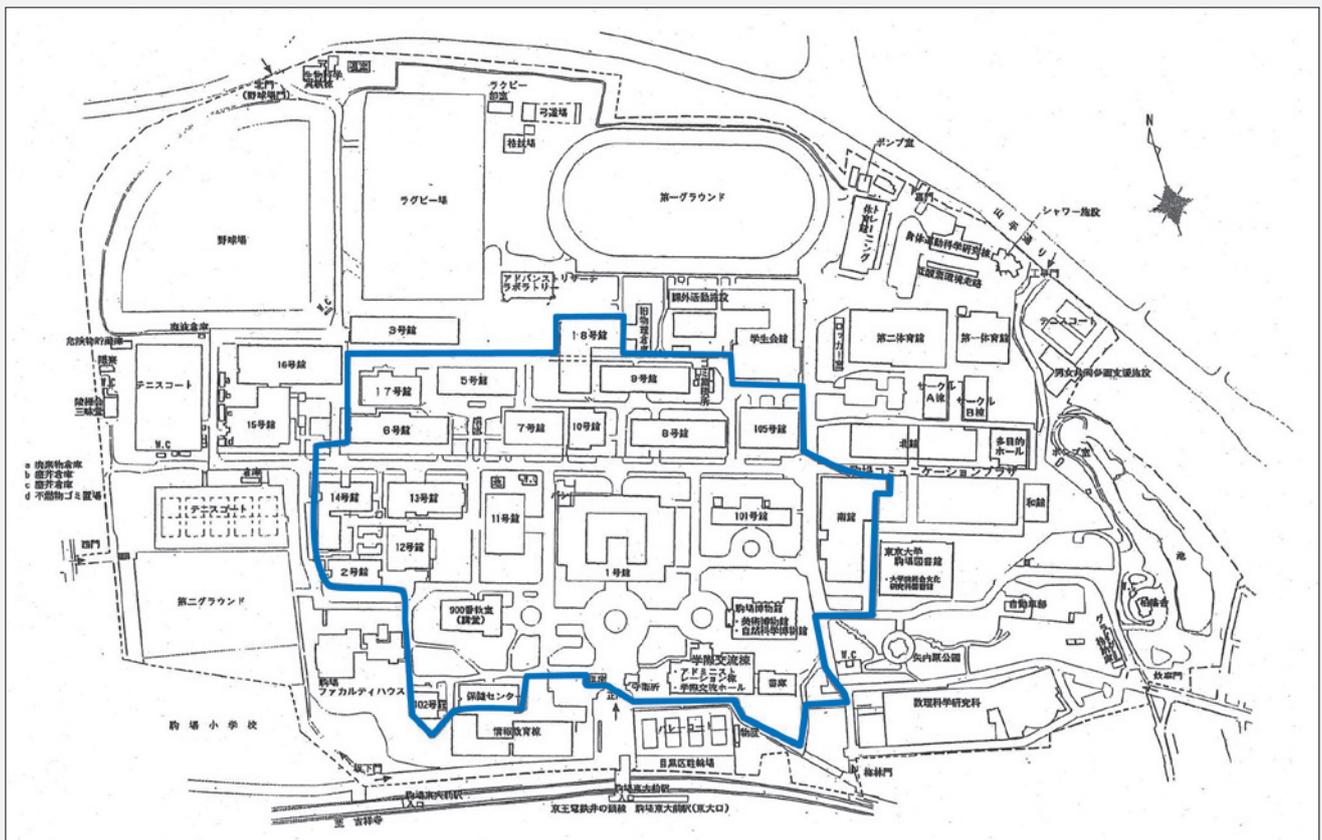
報道関係者等は、腕章による識別ではなく、本学広報委員会の発行する「入試特別入構証」を所持する者のみ入構を認める (報道関係者の取り扱いは、本学広報委員会を通じて行う)。

2. 「入試特別入構証」の発行

「入試特別入構証」の発行手続きは、本部総務グループ総務チームで行う (報道関係者を除く)。

3. その他

入試当日、車輛の入構は原則として禁止する。



	氏名	異動内容	旧（現）職等
（退 職）			
20.11.30	JOHANSSON JÖRGEN ALF THURE	辞 職	生産技術研究所准教授
（採 用）			
20.12.1	中島 研吾	情報基盤センター教授	情報基盤センター特任教授
20.12.1	大久保 範聡	大学院農学生命科学研究科准教授	大学院理学系研究科特任助教
（昇 任）			
20.11.16	秋山 泰身	医科学研究所准教授	医科学研究所講師
20.12.1	上妻 志郎	大学院医学系研究科教授	大学院医学系研究科准教授
20.12.1	阿部 修	大学院医学系研究科准教授	大学院医学系研究科講師
（配 置 換）			
20.11.16	長島 利夫	大学院工学系研究科教授	大学院新領域創成科学研究科教授

※ 退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。
 東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。

Contents

特集

- 02 第7回ホームカミングデイ開催！
- 04 平成20年度学生企画コンテスト表彰式開催

NEWS

- 06 本部総務グループ
総長予定者決まる—第29代総長に濱田純—
理事・副学長—
- 07 秋の紫綬褒章受章
- 08 文化功労者顕彰
- 一般ニュース
- 10 地球観測データ統合連携研究機構（EDITORIA）
「データ統合・解析システム（DIAS）」平成
20年度中間報告会開催
- 10 本部奨学厚生グループ
学寮・国際学生宿舎で消防訓練を実施
- 11 地球観測データ統合連携研究機構（EDITORIA）
北京アジア水循環イニシアティブ（AWCI）
会合についての報告
- 12 総括プロジェクト機構
「学術統合化プロジェクト（ヒト／地球）シ
ンポジウム—我々の未来はどうか」
を開催
- 13 学生相談ネットワーク本部
平成20年度第3回教職員のための「学生の
メンタルケア」講習会を開催

- 14 本部学生支援グループ
「平成20年度学務研修会実務勉強会」開催
- 14 政策ビジョン研究センター
設立記念フォーラム—東大発の知で社会の
課題を解決する—を開催
- 15 本部奨学厚生グループ
「東京大学外国人留学生特別奨学制度平成
20年度10月期研究奨励費受給者証書授与
式」を開催
- 16 本部留学生支援グループ
平成20年度第2回「外国人留学生支援基金
奨学生証書授与式」開催される
- 16 本部入試グループ
入試事務室の設置
- 16 本部入試グループ
平成21年度大学入試センター試験の本学割
当数決まる

部局ニュース

- 17 大学総合教育研究センター
日米高等教育財政ワークショップ
授業料割引戦略と基金の活用
Tuition Discounting Strategy and
Endowment Management
- 18 大学院理学系研究科・理学部
留学生見学旅行の実施
- 19 大学院総合文化研究科・教養学部
三鷹国際学生宿舎にて新人居留学生の歓迎
会行われる

- 19 情報基盤センター
第2回先端的大規模計算シミュレーション
プログラム利用シンポジウムが開催される
- 20 先端科学技術研究センター
高齢者向け転倒予防講座開催
- 21 生産技術研究所
「外国人研究者・留学生との懇談会」開催さ
れる！
- 21 大学院教育学研究科・教育学部
バリアフリー対応施設のお披露目会
- 22 大学院農学生命科学研究科・農学部
自衛消防訓練を実施
- 23 大学院農学生命科学研究科・農学部
「牧場公開デー」開催される
- 24 医科学研究所
技術職員研修（分子医科学・分子生物学関係）
を開催
- 24 大学院医学系研究科・医学部
医学部解剖体慰霊祭が行われる
- 25 史料編纂所
国立大学附置研究所・センター長会議第3
部会シンポジウムの開催
- 26 医科学研究所
動物慰霊祭行われる
- 26 医科学研究所
東大ひまわり保育園開園式を開催
- 27 大学院総合文化研究科・教養学部
三鷹国際学生宿舎で自衛消防訓練行われる
- 27 大学院教育学研究科・教育学部
大学院教育学研究科で外部評価実施される
- 28 社会科学研究所
人材ビジネス研究寄付研究部門の成果報告
会を開催
- 28 史料編纂所
史料編纂所前近代日本史情報国際センター
公開研究会「歴史知識学の創成」を開催

キャンパスニュース

- 30 本部学務グループ
平成20年11月1日現在学生数 —学部学
生 13,964人、大学院学生 13,667人、研
究生等 887人—

コラム

- 32 フロンティア生命科学 第2回
- 33 サステナな日々 vol.10
- 34 Crossroad 産学連携本部だより vol.37
- 35 インタープリターズ・バイブル vol.19
- 35 ケータイからみた東大～東大ナビ通信～
No.13
- 36 コミュニケーションセンターだより No.54
- 36 Relay Column 「ワタシのオシゴト」第34回

◆表紙写真◆

次期総長予定者に決定した
濱田純一理事・副学長
（6ページに関連記事）

INFORMATION

募集

- 37 大学院農学生命科学研究科・農学部
里山フィールドサイエンス推進プログラム
（東京大学秩父演習林黒石試験地長期占有利
用）募集のお知らせ

お知らせ

- 37 退職教員の最終講義
- 37 大学院総合文化研究科・教養学部
「教養学部報」第516（12月3日）号の発
行—教員による、学生のための学内新聞—
- 38 保健センター
年末年始の診療日程のお知らせ
- 38 本部広報グループ
広報センター 年末年始休館のお知らせ
- 38 本部学生支援グループ
アウトリーチ活動のポータルサイトオープ
ン！
- 38 放射光連携研究機構
日本放射光学会創立20周年記念事業市民公
開講座「夢の光が未来を拓く」
- 39 本部国際連携グループ
査証（ビザ）を取得せずにアメリカへ入国
を予定されている皆様へ
- 40 情報基盤センター
“情報探索ガイダンス”
各種コース実施のお知らせ
- 41 本部学生支援グループ
年末年始の体育施設の
使用及び受付について
- 42 本部入試グループ
平成21年度入学者募集要項配付
- 43 本部入試グループ
平成21年度入試に伴う臨時措置（本郷キャン
パス）について
- 44 本部入試グループ
平成21年度入試に伴う臨時措置（駒場関係）
について

事務連絡

- 46 人事異動（教員）

淡青評論

- 48 学際研究と学際教育

編集後記

就職前に学内広報を人事の方に頂いてからまだ1年
も経っていないのに、その頃が遠い昔のようです。若干
体重は減少しましたが、沢山の人ののお力添えをいただき
幸せな2008年でした。2009年も皆様と東大の更なるご
清栄を願って、2008年最後の校了を迎えます。（か）



七徳堂鬼瓦

学際研究と学際教育

2007年にIPCCの第4次報告書が刊行されたが、私の所属する研究センターでは、学外機関と協力して、既に次の第5次報告WG1へ向けた気候変化予測のための数値モデル開発および気候変化シナリオの計算準備が進められている。参画する研究者の専門は、気象学や海洋物理学といった分野から、大気化学、水文学、計算科学まで幅広い。影響評価や温室効果気体の排出シナリオなどを担当する他のWGでは、さらに社会科学の専門家

との共同作業が要求される。こうした研究環境にいと、理系研究者育成の観点から大学院教育について考えることがある。

巷間、学際あるいは学融合研究の推進が盛んである。話題のG-COEにしても、課題名に「統合」「融合」といったキーワードが散見される。複雑化した問題に解決の糸口をどう提供するのかという社会からの要望に対して学際・学融合研究は確かに最も有効な回答だろうし、学際研究の場に有益な人材を供給するのがこれからの大学の重要な役割であることも疑わない。それはしかし、学際研究の場で教育をどう行うかが明確であることとは違う。例えば、議論の共通基盤をもたない学生同士が集められて背景の異なる講義を山ほど受けたとして、そこから学際研究の一線で活躍する人材が生まれるだろうか？ 枝を広く張らせることを意図して根の弱い時期に水をやりすぎた結果、大きく育たない植物ばかり育成してしまうことになっていないだろうか？ 別に学際教育を否定しているわけではない。例えば学位取得後に短期集中的に発展的再教育として行う、あるいは大学院修士課程ならば、ある分野を深く学びつつ、隣接する他分野の話が自然に聞こえてくる程度の緩い連携の下での教育がよいのではなかろうか。要は、受け手にとって適切な時期に適切な内容を、ということである。私自身は、学部生の頃に京都の友人宅で、世に有用なのはジェネラリストかスペシャリストかについて議論したことを思い出す。そのとき「己の拠って立つ点をもたないジェネラリストは無用である」と主張した私は、やがて気象・気候研究の道に入り、その面白さに囚われ、世に有用であるかはさておき未だ学際への道へは積極的に踏み出さずにいる。

渡部雅浩（気候システム研究センター）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報グループを通じて行ってください。

No. 1381 2008年12月12日

東京大学広報委員会

〒113-8654

東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学本部広報グループ

TEL：03-3811-3393

e-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

http://www.u-tokyo.ac.jp